

---

Twinkles -RosedCrystal-

真抖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

T w i n k l e s - R o s e r e d C r y s t a l -

### 【Nコード】

N 9 0 9 6 P

### 【作者名】

真抖

### 【あらすじ】

西の大陸、『ベルニア』。蛇の姿を模した3体の神獣が護るこの大陸には、中央に広がる樹海と、それを飲み込む巨大な帝国が存在していた。エムルガルト帝国 第42代目皇帝、イレイア帝の治める、大陸一の軍と財を誇る大帝国。神獣2体が守護しているというその国の裏で、陰謀が動き出す。

／「DOLL」と呼ばれる、人の姿を模した《自動人形》が存在していた。その中でも、所有者の扱い次第で人と同じく感情を得るという「DOLL」は、『高級玩具』と呼ばれており、全てオーダー

メイドで製作されている。

それらは貴族や富豪からの人気が高く、裏の世界では、全ての《人形師》を統べる『人形師ギルド』さえ知らない場所で、『高級玩具』専用の売買場さえ存在するほどだった。

その中でも、特に高い値でやり取りされるものがある。『TWIN KLES』 「煌めきの人形」と名付けられた、作者不明の『高級玩具』シリーズである。

## プロローグ

逃げる、逃げる、逃げる

何が起きたのか、分からなかった。何時ものように市場で買い物をしていたのに、気が付いた時にはもう腕を引つ張られていて。何があつたのか尋ねても、“あの人”は理由も言わずただ、逃げる、とだけ呟いた。

それでも問う私に、“あの人”は追ってくる者たちに捕まってはいけないのだと言った。

普段から自分のことを話すことはなかったけれど、今は悲しそうに、身勝手な者に命を狙われているようだと少し沈んだ声で言っていた。

日の光が届かない樹海は、じつとりと湿った空気が肌にまとわり付いて不快になる。それでも、止まるわけにはいかないのだ、と思った。それは自分のためではなくて、全て“あの人”のために。

この樹海を抜けた先にある街に住む、幼い頃に世話になった人を頼ろうと言っていたけれど、道なき道を走るのは二人とも初めてで、思うように走れなくて、何度も転びそうになる。

「待ってください、何処まで」

地表に顔を出す樹の根に躓きそうになったり、細い茨の棘で服や頬を切りながら、樹海の中をもうずいぶんと走り続けている。振り向いても追ってくる気配は無く、私は逃げ切れたのだと思った。

それなのに“あの人”は休もうとせず、時折倒れそうになるのを見てとても心配だった。昔から活発に動く方ではなく静かに本を読む人だったから、きつともうそんなに走るほどの体力はないはずなのに。

「くっ！」

ごりっという鈍い音がして、“あの人”が倒れる。一瞬何が起こ

ったのか分からなかったけれど、下を見れば出ていた根に足を引っ掛けたのだということはすぐに分かった。

小さく叫びそうになるのをこらえて駆け寄る。大丈夫、追っ手なんてもう居ないからと自分に言い聞かせながら。怪我を診ようと服が汚れるのも気にせず地面に座り込んで、触れようとした瞬間ひゅんっという音がして目の前を何かが飛んでいく。

何が起こったのか理解できない。人の気配なんてないのに。少し離れた地面を見ると、矢が刺さってるのが見えて あれが飛んできたのだと漠然と理解した。

まさか、どうか違いますようにと願ったけれど、そんな願いは樹海に飲み込まれて天に届きもしない。

「リュセア、逃げなさい」

その言葉に、私は子供のようによい、いや、と頭を振る。昔に契った誓いに反することなんて、私にはできない。

「嫌です、貴方をおいて」

「逃げなさい」

二度目は、少し怒ったような強い口調で。普段は聞かないその声に私は思わず、怯えて俯く。

「でも……」と遠慮しがちに上目遣いで見ると、“あの人”が少し微笑んだのが見えて安堵した。怒ってはいないけれど、目だけは笑っていない。

“あの人”は自分の意思を曲げようとはしなかった。それが分かっただけ、悲しくなる。

「この程度の捻挫なら大丈夫だから、先に行きなさい」

後から、必ず追いつくから。そう、私に言う。

額に浮かぶ汗が、足を捻挫しただけではないことを物語っていたけれど、“あの人”の眼は逆らうことを許さないと断っていた。

“あの人”からの、初めての命令。強い意志を曲げる術を私は知らない。

足音が近くなる。「行きなさい、ほら」と背中を押され、不安そ

うに振り返ると“あの人”が今度は本当に微笑んでいた。

「絶対、行くから」

その背後に、黒い影。目だけがマスクから見えて、その鋭さに思わず足が止まりそうになる。

背後の気配に気が付いた“あの人”が、短く「行け！」と叫んだ。私はびくつとしてそれでも目を 視線を外せなかった。

目の前で、振り下ろされる刃

「いやあああああああああ……っ」

見たくない、信じたくない。

“あの人”と目が合った瞬間、私は反射的に走った。走りながら叫ぶその声が、違う誰かのものかのように聞こえて。

悲鳴が、樹海に飲み込まれていった。

## 紅色人形 01

暗闇。

何も見えない、何も無い場所を走り続ける人がいる。

ボロボロに裂けた服を着て、髪に木の葉や枝を引っ掛けながら、ずっと走っている人が居る。

（ああ……あれは、私……）

泣きながら、暗い道を。必死に、ひたすら。

時折名残惜しそうに振り返りながら、それでも何かから逃げるように。

暗く深い樹海の道なき道を、悪夢から逃れるために。

（このまま、何処かに消えることができるなら……）

貴方が居なくなった世界は、私にとって……。

夜明け前の薄暗い空から、雫が降り注ぐ。

嵐の多いこの季節には珍しい、風のない静かな雨だった。風がないからか、ぱらぱらと頭上で雨滴が葉に当たる音が聞こえる。一旦樹海に入ってしまったえば樹木の葉が自然の屋根となり、びっしりと濡れるほどの雨は地上まで届かない。だから彼も雨具はローブだけで、雨水の降り滴る樹海を一人歩いていった。

「いつもは、降るときやとことん荒れるくせに……」

ぼつりと呟き、彼はほぼ日課になっている薬草採取を続ける。樹海は素人目には何も無いように見えるが、ここにしか生えない薬草が数多く存在していた。もちろん毒草も生えているが、薬草よりも

需要は低いのでいつも彼は毒草を探ろうとはしない。

がさつという音がして振り向くと、藪からウサギがひょっこりと顔を出しているのが見えた。きよろきよろと周りを見ていたウサギは、彼を見つめ慌てたように走り去っていく。

その後姿を眺め、彼はぷつと小さく笑った。

「なんだ、ウサギかよ……」

相変わらず平和な樹海の姿に知らず和ませられる。外がどれだけ争っている、樹海にその空気は届かない。何故ならば樹海には樹海のルールがあり、それを侵せばそれ相応の報復があるからだ。それは時には国を一国滅ぼすこともあり、故に樹海には手を出さないという暗黙のルールが人間世界に生まれた。

だからこそ樹海は世界一安全な場所であり、どれだけ樹海の外で争いがあるうとも、深い樹海は普段と変わらない姿を見せてくれる。がさがさ……がさつ。

再び聞こえた葉の擦れる大きな音に、彼は違和感を感じて振り返る。

「な……」

先ほどウサギが出てきた藪から再び出てきたのは、樹海に住んでいる狼。それも1匹や2匹ではなく、10匹前後の狼が群れを成して、彼を囲むように次々に現れる。敵意を感じられなくても、その数を見て思わず数歩後退りをした。

触らぬ神に祟り無しと言わんばかりに、回れ右をして早々に退散しようか……と考えていると、ずるっ、ずるっ、という音をさせながら2匹の狼が、何かを銜えてこちらへ向かってくるのが見える。

その、銜えられているものを見て、一瞬で帰る、なんて選択肢が彼の頭の中から消えた。

「ちょ、なんだって……」

目の前に引き摺られてきたのは、ボロ布を被った、薄紅色の髪の毛。

「……Twinkles」



狼達が持つてきたのは、樹海を必死で走っていたはずのリュセアだった。狼が銜えていた腕を放すと、その身体は力なく地面へと落ちる。それを見て彼は考える間もなく駆け寄っていた。

血の付いたボロ布を剥がして損傷を確認する。服が数十箇所破れていたが、内部保護と人間の肌に限界まで感触を近づける為に施されている特殊素材にまで達している部分は少ない。主に損傷が酷いのはやはり足元だが、幸いな事に切り口は浅く、全体を丸ごと取り替えるような大掛かりな修復は必要ないだろう。

問題は、と彼はリュセアの前髪を手でそつと退かす。人間とは違い、異常が出ていてもDollerは見た目では全く分からない。それがDollerは使い捨てという認識を人々に植えつけている原因でもあった。

「……あんまり、したくねえな」

逡巡した結果ため息を吐くと、リュセアの額に置いた手に自身の額を近づける。その顔にいくつか玉の汗が浮かぶが、何か一点に集中している彼はそれを気にする様子もない。

暫くして思いきり息を吸いながら、彼は上半身を起き上がらせた。集中をしすぎて息をするのも忘れていたようだ。肩で荒い息をしている彼は、何かを確認して満足したようにも見えた。

「ふふ、はっ」

耐え切れない笑いが漏れる。それを抑えるように顔面を手で被い深呼吸をすると、彼は膝に手を付きながら立ち上がった。

「はー……しばらくすりゃ、目が覚めるだろ。んじゃオレはこれで帰るぞ」

厄介ごととはご免だ、などと思いつつ、今まで静かに見ていただけだった狼達が突然進行を妨げるように立ちはだかり、牙を剥いて唸り声を上げた。

彼の頬が僅かに引き攣る。

「……いや、連れて帰れないっつーの」

「ウウウウウ……」

「は？　ちょ、無理だつて！　樹海の狼と馴れ合ってるの見たら、オレの人間生活終わるだろっ」

「グルル……ガアウッ」

「おま……オレ、１人困つてんのよ？　これ以上面倒見るとか愚の骨頂　ああああ、わあつた、だから威嚇すんなよっ」

小さく舌打ちをして、彼は薬草の入った腰の籠を腰の後ろへと回す。そしてため息を吐いて仰向けにしたリュセアの背と足の下に腕を入れて抱きかかえる。

ずしり、と見た目の予想よりも重い重量が両腕にかかる。普段薬の調べばかりしている彼にとって、これだけの重さのあるものを持ち上げるのは滅多にない。恐らく部屋に戻る頃にはヘタって居るだろうなと彼は小さく息を吐いた。

その様子に気付いたらしい狼達が鼻先で彼の腰付近を突付いてくる。それに、彼は苦笑を返す。

「大丈夫だ」

それからようやくといった状態でリュセアを連れ帰った彼は、宿場の自分の部屋のベッドに彼女をとりあえず寝かせた。カーテンをしつかりと閉めてから、どこか慣れた手つきで着ている服を脱がしていく。そうして下着だけの姿になったリュセアの『傷』を、彼は確認しながら修復を始めていく。

直接薬品の臭いを嗅がないようにと口元を布で被い、鍵のかかった箱を開き中から道具を選び出す。幾つかある瓶の中から透明な液体と肌色の液体の入った瓶を取り出すと、静かに箱の蓋を閉じた。

修復は思ったよりも時間がかかる。一つ一つは大した物でもないのだが、数が多いとそうは言ってられない。ようやく全ての『傷』の修復が終わったのは、もう朝日が昇りきり外から住民達の声が聞こえるようになってからだった。後は薬品が乾くのを待っただけだが、それもまだ時間がかかるだろう。

液体の入った瓶と道具をまた元のように鍵の付いた箱に仕舞い、彼はカーテンを開いて窓を開ける。小さく何かを呟くと、部屋の中

の空気が渦巻くように外へ出て行き、代わりに新鮮な少し肌寒い外の空気が部屋を満たしていく。

ふっと彼は笑みを浮かべ、短い感謝の言葉を誰にともなく呟く。少し離れた樹海から、少し甲高い鳥の鳴き声が聞こえた。

ほっとした彼は全身の力が抜けそうになるのを堪えて窓枠に腰掛け、視界の先に広がる樹海を眺める。終わりの見えないその森は、まさしく『海』と呼ぶに相応しいと彼は思う。限りは在るし、対岸も存在しているはずなのに、どこまでも広がっているように見える『海』は、常に人々にとって未知の領域であり続ける。それはその場所特有の独特なルールが存在しているからだろうか。

樹海は、優しい。それは誰にでも向けられるものではない。彼は、自分が樹海にとって特殊な存在だと知っていたが、そこに留まる気にはならなかった。樹海から逃れるために遠出もしたが、何故か気が付くと樹海の傍に戻っている自分にも気が付いていた。

樹海は優しい。けれど残酷な場所。いつか戻ると理解していながら、彼は拒み続ける。何時まで、とは考えていない。ただ『樹海の物を持ち出さない』というルールを何故か自分には許している樹海には、何時か何かを返さなければいけないとは、漠然と思っているのだが。

ふと思考が同じことを反復し始めたのに気づき、彼は息を吐いて窓から離れた。

リュセアの修復した箇所が乾いているのを確認して、彼はベッドの下に仕舞い込んでいた衣装ケースを引っ張り出す。その中から適当な服を取り出すと、服を脱がした時のように手早く服を着せていく。それからベッドに寝かせて布団をかけると、息を吐いた。

日が高くなる前に薬の調合は終わらせないといけない。今日採つて来た薬草も早めに干さなければと、彼は床の上に使い古しの大きな布を広げ、その上に籠に入った薬草を広げた。それから採取した薬草を種類ごとにまとめて干し、乾いた薬草を束にしたり粉末にしたりという一通りの作業を終え、彼は椅子に座り薬草の在庫を確認

する。

傷薬は毎日のように消費するし、痛み止めも消費が激しい。もしもの時を考えて確実に在庫を確保しているため付近の医者からの評判は良いのだが、顧客ならまだしも予期しないところから薬剤が欲しいと言われるのは勘弁して欲しいと彼は思う。

本来なら街の診療所に薬剤を提供してるので精一杯なのだ。こんな辺境の薬剤師よりも、製薬会社を頼れと言いたいのが本心だろう。在庫が規定数を満たしているのを確認し、何気なくリュセアを見た。その目元に、光る何か。

「……泣いてる？」

眠っているはずの彼女が泣いていることに気が付いて、傍らへと近づく。その顔を見て、壓されているような気配はないが、心なしか苦しい表情をしている気がして、彼は眉根を寄せた。

「ヴェルナス……」

呟いた名前を聞き、目を細め彼女を見る。そしてやっぱりという表情で小さくそうか、と呟いた。

何か言いたそうに口を開いて、閉じる。それから息を吐いて首を振ると、切なそうな表情でリュセアを見た。

「……どういう理由かは知らないが、マスターと別れたか」

軽いため息を吐き、机の傍に置いてあった椅子を引き寄せベッドの横に座る。そのままにしておくのもどうかと思い袖で涙をふき取り、それに満足して腕を組んでリュセアを眺めた。

人形の中でも最上級と言われるシリーズのひとつ、『Twinkles』。ただひとつ、たった1人で作っているという事以外はなにも明かされていない、作者不明、依頼方法も確固たるものが無いオートマタ謎多き自動人形。

類似品は多々あれど、本物は宝石や輝石と類されるものを原動石コアとしていたものしかなく、例外はあるが原動石に似た色彩を瞳や髪に持つのが『Twinkles』だ。その『Twinkles』のナンバリングDollを手元に置いているということは一種のステ

ータスで、D o l l 愛好家の貴族や裕福な者達が手に入れようと躍起になるほどという。

それでも、『Twinkles』シリーズは世界に10も満たない数しか存在しないという噂だ。その希少価値がさらにD o l l としての価値を引き上げている一因だろう。

「や……いやああああああつ」

「な、なんだ　！？」

物思いに耽っていたところに突然彼女が叫んだので、彼は驚いた拍子にどすん、という大きな音を立てて椅子ごと後ろに倒れた。倒れる時にリュセアが身を起こしたのが見えたが、がつつという音と共に目の前に火花が散り、視界が闇に覆われる。

後頭部がかなり痛い。どうやら受身を取り忘れてまともにぶつけたようだ。

「……あ？」

間の抜けた、状況を把握していない声。

痛みを噛み殺して起き上がったとした腕を、掴まれて引つ張り上げられる。

「え、えつと……」

「目が覚めたみたいだなー」

殴打した後頭部をさすりながら、彼はリュセアを見た。衝撃の余波で色彩が乱れる視界の中、唯一澄んだ紅水晶のような瞳が、申し訳なさそうに視線を彷徨わせている。

はぁーつとため息を吐き、彼は椅子を直し座った。殴打した部分を冷やすのが先かと思ったが、とりあえず大丈夫だろうと放置することにする。どうせしばらくすれば瘤にもならず治るだろう。

相手の視線が自分を捉えているのを確認して、視覚に異常はなし、と彼は判断した。残りはおいおい分かるだろうとひとまず安堵する。そして警戒させないための笑顔を作り、話しかけた。

「ここがどこに見える？」

「……部屋、です」

「おーし。視聴覚は大丈夫っぽいな。んじゃ、キミ名前は」

「……リュセア」

「ふむ……マスターは？」

「……」

「言えない？ さすがTwinklesというか……んじゃ、どうして樹海に入った？」

「それは……」

話していいのだろうか、とリュセアの視線がさまよう。

その様子を見て、彼は苦笑した。どうやら『Twinkles』の持つ秘密主義な機能は正常らしい。命令されれば従っただけの、ただの“人形”とは違う部分の一つだ。

「まあ、いいさ。ここはまあ、訳有りの人間たちが集まる、街外れの集落だ。　　オレはソレイエル。周りはソルって呼ぶけど、キミも好きに呼んでくれ」

「……ソレイエル、様」

「うーん……様、は要らないんだけどなー」

とんとん、と戸を叩かれる音がして、ソレイエルは一旦口を閉ざした。こんな時に来客かよ、などと内心悪態をつきながら立ち上がる。リュセアが見ているその視線を意識しながら、ため息を吐いて戸へと向かった。

外から中が見えないよう、戸を少し開くだけにとどめ、来訪者を確認する。

一瞬。ソレイエルの目がわずかに見開かれ、軽く眉を寄せるのがリュセアの位置から見えた。そのまま二言三言言葉を交わし、戸が閉められる。どうもあまり歓迎しかねる客のようだ。

振り向いた際にリュセアの表情を見て、ソレイエルは肩を竦めた。

「あー、オレ、こう見えて薬剤師やってんだ」

「……薬剤師様、ですか？」

「そぞ。キミを見つけたのも、足りなくなった薬草を採取してたときでさ。びっくりしたよ」

あえて事実を言うことを避けたソレイエルは、そう言つて苦笑の表情を作る。樹海の狼達も恐らく自分達のことを知られるのを好まないだろうという配慮もあるが、一番はリュセアにとって辛い、『マスターと別れた時の記憶』を無闇に思い出させないためだ。

マスターを失う事がD.O.E.にとってどんな意味を持つのか、嫌なぐらい理解している。

「今のはお客さんが来たつていうお知らせだよ」

ソレイエルはそう言つと、リュセアに軽くウインクをして灰色の外套を羽織つた。壁に掛けていた革のカバンを肩から下げる。

「とりあえず面倒臭いの嫌いだから、キミのこと聞かれたらオレの“所有物” って周りには言っておくけど…… オレは誰かを縛り付けるのは嫌いでさ。ここに居る間はオレの仕事の手伝いして、遠くつてか街に行かなきゃ好きにしていよいよ」

「…… ヴェ マスターを探すことは……？」

ソレイエルが戸の前で止まる。そして上半身をひねりリュセアを見ると、ふと真剣な表情を見せた。

探したい気持ちが分からないわけではない。だがどう見ても訳ありの彼女を出歩かせるのも不安に思う。

一拍子考えたソレイエルは、軽く肩を竦めた。

「キミが樹海で何をしていたのかは知らないけど、しばらくは動かない方がいいと思うよ？」

ソレイエルはそう言い残し、戸が静かに閉じられる。

リュセアはそれを見て、ゆっくりとベッドから降りた。そして気が付く 服が着替えさせられている。皮膚の樹脂の切れ目も綺麗に修復されていて、自分でさえ、どこにあったのか分からないほどだ。

最後の記憶は樹海の中で崖から足を滑らせて落ちたことで、今考えれば機能停止していてもおかしくはなかった。もしかしたら停止していたのかもしれない。

「ソレイエル様…… が、修復を……？」

そうとしか考えられない。だが『Twinkles』といえばその内部構造も謎が多く、一度壊れれば修復できないとリュセアはマスターの友人から聞いていた。だから貴重な人形なのだとよく言われていたのを思い出す。

だとすれば、跡が分からないほど綺麗に修復をし、機能停止をしていたかもしれない自分をここまで正常に動くようにしたソレイエルは一体何者なのか。

「……お父様と、関わりのある方なのでしょうか……」

創られたはずの『Twinkles』でさえその姿を知らない、『Twinkles』の作成者。

分からない事が多すぎて、上手く考えが纏まらない。本当はマスターを第一に考えなければならぬのに、自分の置かれている状況が上手く理解できずこちらにばかり考えが向いてしまう。

マスターの行動の理由。狙われた理由。そしてソレイエルが自分を助けた理由。謎は、まだ多い。

宿場から出ると外は相変らずの雨で、ソレイエルは憂鬱気に息を吐いた。しつとりと湿った空気が不快でたまらない。おまけに早朝は風も吹いていなかったはずなのに、昼になって雨も風も強まるとは最悪だと彼は思う。

フードを被り、玄関を出る。布が雨粒を弾く音で周りの音が聞こえなくなるが、初め少しだけ眉を寄せただけで特に気に止めず街道を歩いていく。

（とりあえず、なんとかしてやらねーと……）

リュセアに限ったことではないが、マスターを失って街に“帰って”くる『Twinkles』は多い。彼らの中の何かがそうさせ



るのか、彼らはこの街に戻ってくる。それは、原動石と呼ばれる彼らの命の源がこの街の地下でひっそりと採掘されていることを、どこかで覚えているからかもしれない、とソレイエルは考える。

そうやってあてもなくふらふらとやってくる彼らが、下心の多い連中に捕まり、玩具として売られ、金儲けの道具にされているのを黙って見ていることが出来なかった。だから彼女を見つけた時は、本当はどうしようかと思ったのだ。

ソレイエルは多種族が混在しているこの街に普通の人間として暮らしているが、実際は長寿と言われているエルフだ。けれど人間で居る方がいろいろと都合がよく、特徴とも言える耳を特殊なピアスで隠している。彼らは動物達と共に暮らし、人と接しないように森や山の奥で暮らしている者が多い。その為、希少価値のあるエルフであることが知られると、これまた下心のある奴等のいい餌食になりやすい。

だからなのか、“人形”達に感情移入しているかもしれないという自覚は、ある。エルフのようにある意味長寿である彼らが売り買いされているのは、腹立たしくてたまらない。

リュセアを見た時、まだ動いているのか、それとも機能停止しているのかの判断がつかなかった。このまま放置しても、樹海を彷徨ううちにそのうち動かなくなり、連中に見つかることなく、朽ち果てていくのだらうと思っていた。それでも良いかと思ったのだ、マスターを失った人形にとって、そのまま生き続けるのはまた辛いことだから。

けれど狼達は、見捨てようとしたソレイエルに唸り声を上げた。初めてソレイエルに向けられたその怒りは、どうすればいいのか分からず結局要求を飲み込んでしまった。

動物達と暮らすエルフは、当たり前のように生き物の言葉を解すリュセアが追われていると聞いた瞬間。保護するにしても樹海の巨狼に喧嘩を売る馬鹿は居ないだろうと思ったのに、群れを率いてリュセアを連れてきた狼が「どうしても」と、言うというには脅

しに近かったが、その押しに負けて守るには適さないだろうと思っていたのに自分の宿場に連れてきてしまった。

それが判断として間違っているのか、正しかったのか。今は未だわからない。

「……生きてりやいーがな」

ぽつり、と呟く。それはリュセアを逃がしたマスター・ヴェルナスへの言葉だった。その名前に昔の記憶が刺激され、意味も無くため息を吐く。その知っている同名の者も、確か『Twinkles』を持っていたはずなのだ。

嫌な予感しかない。最後に連絡を受けた手紙と、リュセアが重なる。

市街地に向かう街道を暫く歩いていると、彼は道の脇に見慣れた馬車が停まっているのを見つけた。いつもの場所よりも遠いことに違和感を感じるものの、たまにはこんなこともあるさとソレイエルは特に気にも留めない。

自然さを装うように何気なく近づき、街道と反対側に回り込む。一拍置いてこんこんと戸を叩くと、少しだけ戸が開かれた。

見える内装と革のブーツで相手を把握したのか、ソレイエルはにやりと口元を歪めた。久しぶりの、ご対面。

「よおお客さん、今日は何が欲しいんだ？」

「白々しいな。よく知る仲だろう、ソレイエル」イグレシオ」

「……用件をさっさと吐けよ、クソ親父」

フルネームで呼ばれ、明らかに不機嫌な口調になったソレイエルに対し、馬車の中にいる相手がくつくつと笑う。そして相変らずだな、という小さな呟き。

それが聞こえたのか、ソレイエルの眉が片方だけ持ち上がる。

「用がねーなら帰る」

「……そう言うな。乗れ」

命令口調に聞こえるが、決してそういうつもりがないことを知っているソレイエルは、ふいっと顔を逸らした。相手もそれを分かっ

ているのか、特に怒る気配はない。

「嫌だね」

「患者を診て、適切な処置をしてもらいたい」

「アンタらのご自慢の医者がいるだろうが」

言葉に詰まる気配。してやった、と思って彼は少し機嫌を直した。自分に「直接診て欲しい」と言うのは初めてのことだったが、ソレイエルは今の自分のスタンスを変えるつもりは一切ない。彼は薬剤師という今の状態がお気に入りなのだ。

「……内密のことだ。お前に診てもらいたい」

「サービスにや入らないね。オレは薬剤師だ。薬の調合しか注文は受けねえぜ？ それこそ長い付き合いだ、分かってんだろ？」

「やはり……そう、言うと思った。明日までに用意してくれ。また来る」

苦笑の末に真っ白い封筒を隙間から渡され、ソレイエルは不機嫌そうにそれを見ていた。「なんだよこれは」と言おうとして顔を上げたそのタイミングで、戸が閉められる。少し驚いて目を見張っていると、馬車が急に動き出す。数歩離れると、そのまま馬車は市街地へと消えていった。

それを見送り、小さく舌打ちをして封筒を開けようと裏を見て、固まる。

「……そういう、ことかよ」

何年ぶりかに見る、とある身分の者のみに許されているはずの青い蠟。そのうえに捺された、印。ギリリと歯軋りをして、彼は憎々しげに去った馬車を睨みつけた。心臓が五月蠅いほど鼓動を強める。知って、分かっていれば今すぐ飛んで行ったかもしれない。いや、今すぐ様子を見に、確認をしに行きたい。

無事なのか。生きているのか。怪我はどのぐらいなのか。出血は、負傷の度合いは、病気は　オレを、覚えているだろうか。

封筒を両手で握りながら、ソレイエルはその場に蹲る。握り締めた手を額に当てて、小さなうめき声が漏れ聞こえた。

「クソッ」

勢いよく立ち上がり雨で濡れた袖で乱暴に顔を拭く。気が付けば雨は止み、見上げれば雲の切れ間から日が差しているのが見えた。それを見てソレイエルは細く長い息を吐いた。

カバンの中に乱雑に封筒を入れる。薬瓶が擦れ奏でる音が耳を掠めたが、彼はお構いなしにカバンを肩に掛け直して宿場の部屋へと向かう。

整備されていない道は雨で泥濘を作り、泥水が跳ねる。だがソレイエルはそんなことなど気にする様子もなく、足早に目的の建物へと向かった。

宿場の入り口に用意されていた布と水で靴の泥を綺麗に落とし、階段を上る。そして部屋の前まで辿り着くと、無造作に戸を開いた。部屋の中を見たソレイエルは、戸を開いた姿勢のまま、その表情を引き攣らせた。

「あ、お帰りなさい、ソレイエル様」

「……なにしてんの？」

「え……あの、いけませんでしたか？」

「……いや、だからさ」

部屋に帰ってきた彼を出迎えたのは、真っ白いフリル付きのエプロンを身に付けて、部屋を掃除しているリュセアの姿だった。彼女がやったのだろうか、出かける前までは乱雑に括られ棚に無造作に置かれていた薬草達。ソレイエルは薬草の区分をするのが面倒で、自分が判ればいいと放置していたのだ。が、どこから入手したのか分からない同じ形をした保管用のビンに一つ一つ綺麗に仕舞われ、さらにラベルまで歪みなく綺麗に貼られている。貼られたラベルには種類や薬草名まできちんと記され、置ければいいといって適当に組み立てて段の高さもまちまちだった棚は、段の高さが揃えられ中に道具や薬草の入ったビンが並べられていた。

よく見れば調合した薬まで、きちんと分類されている。ソレイエルは薬と分類されたそれが合っていることに気付き、一体どうやっ

て薬を分類したのかと不思議に思う。

咄然として戸の前に立っていると、後ろから来た誰かに突き飛ばされてソレイエルはよろける。予想していなかっただけにもろに衝撃を食らい、コキンと鳴った腰に鈍い痛みが走った。

「うおっ」

「はい、どいてどいてー。リュセアちゃん、これもいるー？」

「あ、ありがとうございます」

見覚えのあるピンク頭のちびっ子とリュセアが仲が良さそうに話をしているのを見て、ソレイエルはがっくりと肩を落とした。どうみてもこのちびっ子は、この宿場　右の建物は宿泊施設、左の建物は経営者家族の住む建物で、2階の一部の部屋は宿場の主人が信用できると判断した者に賃貸している。ソレイエルはその一室に住んでいる　の娘にしか見えない。

そのちびっ子が、何故オレの部屋に出入りして、リュセアと仲良く話をしているのだろうか。

「……レミア、何してるんだよ」

「あーら、帰ってたの？　ソル」

レミアの嫌味たっぷりな言い方に、ソレイエルは眉をぴくり、と跳ね上げる。今に始まったことではないが、どうもレミアはソレイエルに嫌味をこれでもかというほどよく言う。まるで嫌われているかのような。

だがソレイエルは耐える。どう見ても13歳から15歳にしか見えないレミアの挑発に乗るのは大人気ない。

「先ほどお帰りになられたんです」

「へえー。別に帰ってこなくていいのに。リュセアちゃんみたいに綺麗にお部屋を使ってくれる人のほうが、アタシは嬉しいわー。ね

ー

「……うるせえ、ちび」

「なんですって！？　誰がチビよ！　アタシはあんたよりずっと年上なんだから、チビなんかじゃないわっ」

「あー、はいはい。んじゃ、うるさい小ババア」

「きーっ」

「あ、あの、喧嘩なさらずに……」

とうとう我慢できなかったソレイエルの一言で2人は険悪な空気を放ち始める。その間に挟まれる形になったリュセアは、おろおろとしながらもなんとか宥めようと必死な表情だ。

だが、引きつった笑みを浮かべながら、ソレイエルもレミアも引き下がるうとはしない。

むしろレミアはソレイエルの正面まで進み、頭2つ分も背の高い相手を真正面から睨んでいる状態だ。そう簡単に引き下がるつもりが無いことは目に見えている。

「お2人とも、落ち着きましょう？」

「ん、そうだな。ちびに腹立ててもしかたねえ」

「ちびちび言わないでくれない!？」

「悔しかったらでかくなってみるよ」

「きいっ、ドワーフに喧嘩売ってるわね!？」

「……それまでにしてください」

2人の言葉を遮る、地の底から響くような低い怒りのこもった声に、今までリュセアの呼びかけには反応さえしなかったソレイエルとレミアが息を合わせるようにぴたりと止まった。そして、歯車が軋むような音が聞こえそうな動作で、同時に声の聞こえた方々を向くリュセアがあっ、と小さく声を上げる。

廊下の先を見るとにこやかな顔で、けれどもはつきりとした怒りオーラをまとっている青髪の青年が、奥の部屋の戸の前に立っていた。

青年が一步近づく。

2人が一步下がる。

また、青年が一步近づく。

また2人が一步下がる。

どうしよう、とリュセアが困惑していると、強張った笑みでレミ

アとソレイエルが互いに手を握っていた。

「……レミア、オレ、思ったんだ」

「……ええ、そうね。アタシも思ったわ、ソル」

2人は一瞬目を合わせ、次の瞬間。

「にいいいいげええええろおおおつ」

「ライが怒ったあああつ」

まさに脱兎のごとく。2人は青年と反対側へ向かって走り、その勢いのまま階段を下りていく。どかつ、ぱりんつ、という音と共に小さい悲鳴が階下より聞こえた。どうやら勢いを殺せずに壁に当たったようだ。そのまま足音が戸の開閉音と共に聞こえなくなる。

きよとん、とした表情でそれを見送ったリュセアが首を傾げていると、青年はソレイエルの部屋に入り、手に提げていた紙袋を机の上に置いた。

「まったく、あの2人は幾つになっても……リュセアさん、これ、食事です。ここの近くにある食堂のサンドイッチは美味しいんですよ。ソルの分もありますが、お腹が空いたら遠慮なく食べてください」

「あ……ありがとうございます。ライアン様」

「いえいえ、どういたしまして……ああ、だいぶ片付きましたね。部屋」

ライアンは普段から散らかりっぱなしの部屋が片付いたのを見て満足げだ。どうやら彼は、レミア以上に部屋が散らかっていたのを気にしていたらしい。

何も知らないリュセアは、無邪気になっこり笑って応える。

「はい、皆様がいろいろと世話をしてくださるので」

「それは良かったですね。ソルはあまり親しい付き合いをしませんし、他人を部屋の中に入れたがらないので、みなさんここぞとばかりに世話を焼きたいのでしょうね」

意外な言葉にリュセアは目を見開いた。

「そつ、なのですか？」

「ええ。特に自分以外が薬草や薬品を触ると、凄い剣幕で怒るんです。以前僕も怒られたことがありますから……多分職業柄、大切な商売道具をあまり触れられたくないのでしょう」

そう言われてリュセアは部屋を見回す。薬剤師なら、薬草や薬は大事なのだろうと思ひ勝手に整頓してしまつたが、ソレイエルは何も言わなかつた。何故なのだろう？

きつと忙しくて整理が出来ないのだらうと思ひ、世話になる恩返しにと良かれと思つていた行動だつた。深く考えずに勝手をしてしまつた事を後悔するも、ソレイエルは何処かへ行つてしまつたままだ。もし機嫌を損ねてしまつたら、自分は行き場をなくしてしまう。困つたように見返してくるリュセアに、ライアンはにっこりと微笑んだ。

「大丈夫です。もし怒られたのでしたら、僕がなんとでもして差し上げますから」

「はい……」  
「にっこにっこ。」

微笑んでいるライアンの背後に真っ黒い何かを見たような気がしてリュセアは、もし言つたらソレイエルはどんな目に遭うのだろうかと、少し心配になつた。

「……」

「どうかした？ ソル」

「……今、ものすごい悪寒が……」

宿場から少し離れたところに建つ食堂で、ソレイエルは背筋を走つた寒気に身を震わせた。

リュセアに対してソレイエルが『集落』と呼んだこの村は、何も



知らないような街の者が樹海へ迷い込まないように、そして貴重な資源が採取できる地下洞窟へ許可のない者が侵入できないようにと監視するために作られた村だった。だが今村に暮らす者の中でその事を知っているのは一握りしか居らず、若い層で知って居るのはレミアの兄ぐらいだろう。

何時からか村は他種族を受け入れるようになり、同時に他の街から流れてきた貧民層までも居着くようになっていた。そうして集まった者達が今のこの村の姿を作り出したと言っても過言ではない。昔よりも建物が増え設備も整った村は昔に比べて賑やかだが、役目を果たすには心許無い状態にもなっている。それでも問題が出てこないのは、村を率いる者達の実力があるからだろう。

とはいえソレイエルはこの食堂が気に入っている。若いうちにここに店を建てた店長は、無愛想だが面倒見が良く自分も世話になっているし、料理が美味しいのが何よりよかった。

店長の娘だという、見た目は店長に似ず美人な若い給仕の娘が持つてきた肉と野菜の炒め物をつつきながら、レミアが頬を膨らます。「あーあ、ライも酷いわよねー。なんでいつもの口喧嘩なのにあんなに怒られないといけないのよー。リュセアちゃんにイトコでも見せたかったのかしらん？」

「知らねーよ。ったく、誰に向かってエラそーな口を  
カランカラン。」

戸が開く音を聞き、この時間に珍しいなーと呟きながら振り向けば。一番に目に入ったのはその空より鮮やかな蒼い髪。

相手が誰なのか分かったのだろう。心底嫌そうに表情を歪め、ソレイエルが呟く。

「……噂をすれば、なんとやら」

「何か言いましたか？ ソル」

呟きが聞こえたのか、につこりと微笑み、ライアンは2人が座っているテーブルの空いている席に座る。給仕の娘に注文を頼むと彼は微笑んだままソレイエルを見据えた。よく見ればその目は笑って

居らず、何かに対して非常に怒っているだろうことが窺えた。

ああ、バレたなと冷静にソレイエルは考える。でなければライアンが怒る理由がつかない。

「一体何処で拾ってきたんですか、彼女を」

やっぱり。思ったとおりの言葉に、彼は内心苦笑する。

こうなるだろうことは予測していたとはいえ、傍にレミアがいる以上余計なことを言えるわけないだろうと思うソレイエルは、あえて知らぬふりをすることに決めた。

「知らね」

「知らない、ではないでしょう？　彼女は此処に来るような人ではないはずです」

「ちよ、ちよっと何のこと？」

「ちっ……レミア、ちよっと席外せ」

喧嘩腰とも取れる口調で話すライアンに対し、ソレイエルはこっちの意に反して話題を逸らさせないことに苛つきが隠せない声色だ。不穏な空気になったのを敏感に察し焦って止めようとしたレミアは、返ってきたその低い不機嫌そうな声に一瞬殺気を感じ、ビクリとした。少し大きな耳がしょんぼりと下を向く。

「……なによ……」

幾許か拗ねたような声色でぶつぶつと文句を言いながら、レミアは2人の様子を窺いつつ席を立った。

レミアが知っている限り、ライアンがここまで苛付いているのは初めてだった。リュセアのなにがそうさせるのか。「此処に来るような人ではないはず」という言葉の、その意味を図りかねる。けれどもどうやらこの2人は、それについての話を自分に聞かれたくないと思っているということも察してしまう。

どんなに仲が良くても結局自分は蚊帳の外なのだという疎外感を感じながら、レミアは入り口で振り返りソレイエル達を見た。こうして自分抜きで話をしているのを何度見ただろうか。

「あんま喧嘩するんじゃないわよ」

不安げな声でそう言い残し、レミアが店を出る。ドアベルが揺れてカラコロンと音を鳴らしたが、2人は見向きもしない。

残ったソレイエルは今日何度目かのため息を吐き、ライアンを見る。妙に鋭い彼のことだ、恐らくリュセアの原動石のことも、持ち主のことも薄々感づいたに違いない。けれど今それをここで言うわけにもいかなかった。

どうするか頭を働かせながら、ソレイエルは肩を竦める。

「何処で拾おうが、関係ないだろ」

「あの原動石　滅多に採れない輝石ですよね」

「……さあ？」

「また、とぼけますか……」

今度はライアンのため息。ソレイエルは皿の上の料理をつついていたが、ちらりと視線を向ければ呆れたような、少し怒っているような表情がそこにあつた。ライアンがそういった表情を見せるのは自分かマスターの前でだけだということを知ってはいるものの、その珍しさよりも自分の感情の方が優先される。

不貞腐れたようにソレイエルが顔を背けると、今度は苦笑だ。思わず子供じゃないと噛み付きたくなつたが、それをぐつと堪える。

「まったく、貴方はご自身を幾つだと思っているのですか。そんな子供じみた反応はそろそろ止めた方が良いでしょう」

「……うるさいな」

「数年前。“あれ”は僕らの“父”の友人に送られました」

ぴくり、とテーブルに置いてあるソレイエルの指が動く。それを見逃さないライアンは、小さく口元に笑みを浮かべた。

そして胸元のポケットから折り畳まれた紙を取り出すと、彼はソレイエルの前にそれを差し出した。

「もちろん貴方も知っているはずですよ」

ぱらりとテーブルの上に落とされた小さなメモに、ソレイエルは目を見開く。そしてやっぱり、とソレイエルは表情を歪めた。

その紙に書かれている名前は、両方ともごく最近聞いたもの。ラ

イアンが何故知っているのか　そんな疑問さえ、考える余裕がなくなる。

「その友人の“病死”　そして容疑をかけられた“Doll”。  
嫌な香りがしませんか？」

「……オレは、意地でも助けるからな」

自分に言い聞かせるかのように呟き、ソレイエルはその紙を握り潰した。様々な憶測が頭の中を駆け巡るも、そのどれをも否定したい葛藤が生まれる。

やがて長い息を吐いたソレイエルに睨まれたライアンは、艶やかな笑顔でソレに応じた。

## 紅色人形 02

『リュセア』

優しい声。

何時も聞いていた……大好きな声。

私が見ていた、いつも見ていてくれた人。

『リュセア、私と居てくれてありがとう』

これは自分の記憶だと、どこかで冷静な声が聞こえる。

いつのことか 思い出そうとした途端、視界に鮮明な緑が飛び込んできた。その光景は、忘れるはずもないもの。とても大切な、忘れてはいけない記憶だ。

とても静かなその場所で、あの人は膝を付いて遠くを見ている。その少し寂しそうな横顔を思い出すたび、この胸が苦しくなるんだなんて、あの人は気付いていただろうか。

「結局、最後まで君を紹介することが出来なかった」

墓地の、奥。森を背にした丘の上で、質素な墓石を前に彼が呟く。墓石に名は刻まれていなかった。問うと、そうしてくれと言われたのだと答えてくれた。

母の唯一の我侘だったのだとヴェルナスは笑った。そして自分が逝く頃に、これは自分の我侘だけれども名を刻んでやるのだとも。

母の身内はそれを理解してくれて、伯父夫婦も快く頷いてくれた。だから、とても嬉しかったと。

「もうすぐ、母上の好きな果物が採れます……その頃に、また」

此処で貴女が眠っているわけではないけれど、と小さく呟いた言葉聴いたが、黙って聞こえなかったふりをする。

何故だろう。聞かないことにしたほうが良いのだと、なんと

なく思ったのだ。

毎月決まった頃に伯父達は墓の掃除に来る。だから自分が来なくても綺麗で安心したと微笑んでいた。

「マスター」

「違うよ、リュセア。ヴェルナス、だろう？」

「……ヴェルナス様。だいぶ日も暮れてきました。冷える前に戻りましょう？」

「そうだね。では戻ろうか」

少し寂しげな表情。まだ、この時のリュセアにはその意味するものが分からなかった。

だから頷いて、数歩進み 背後からの足音が聞こえないのを訝しげに、振り返って。

「つ、あ」

いつものように微笑んでいる、でもそれは。

「……リュセア」

ごぼつ、と音がする。生臭い臭い。それが血臭なのか腐臭なのかわからない。でも目の前の“それ”は紛れもない姿をしている。

あまりの衝撃に声も出せないままリュセアがよろけて、いやいやをするように首を振りながら数歩下がる。

見たくない。なのに夢だと分かっているでも視線が外せない。

「や……ヴェル、ナス……っ」

「りゅ……せ、」

『何時か、迎えに』

真夜中の宿場は起きている者もなく、微かに聞こえる虫の音に包まれていた。

さほど広くない一人部屋を借りているソレイエルの方にリュセアが来たことで、ただでさえ狭い部屋がさらに住みにくくなったのは一目瞭然だった。宿場の主もリュセアは一時的に滞在するだけだと理解をされていて、短期間ぐらいなら別の部屋を使っても良いという彼等の提案を、ソレイエルは首を横に振って断わった。

元からこの部屋は基本的に寝泊りをするための物で、壁に並んだ棚と箆笥、それと作業机以外には大した量の荷物が置かれているわけでもない。普段中央に置いているテーブルを退かしてしまえば、床で寝れないわけでもなかった。それに床で寝るのは慣れているから大丈夫だとリュセアの処遇を殆ど強引に押し切ったソレイエルは、レミアの母親が持ってきてくれた布団をベッドの横に敷きそこで丸まるようにして眠っていた。

恐らくただの顔見知り程度が来たぐらいなら、素直に相手を別の部屋に追いやっていただろう。そうはせずにレミア親子の提案を断わったのは、ただ単にマスターと別れたばかりのリュセアが気がかりだったというだけではない。

何も語られない真実は、ソレイエルの胸の内に仕舞われたままでけれどそうしなければならない理由が存在していた。どんなに詰られようと、責められようと 例え拷問を受けたとしても話せない理由が。それが結果的にこの村の人間を守る事にも繋がるなどとは恐らく誰も思いもしないだろう。

本当の事を何一つ話さなかったため最終的に、人からの好意を無碍にするなんて最低だ、そんな奴だと思わなかった いや、分かっていたけれど、などと頭に血が上り怒り始めたレミアに詰られる事になったが、ソレイエルはそれを何時もの笑みで受け流した。それを見ていたライアンさえ疑問を持たずに呆れるほど、その様子は何時も通りの自然を装っていた。

知っている限りの『真実』は嘘も偽りも無い状態で、数年経った今でも誰も口に出さないまま、明かされないまま綺麗に仕舞われている。きっとそれは当人が望まないうちは、何があっても明かされることなど無いのだろうとソレイエルは思う。

そんな誰もが寝静まったその部屋で、苦しげに呻く人影があつた。

「……………あ……………」

かすかな呻き声に、ソレイエルが眉根を寄せながら寝返りを打つ。普段一人で寝ている所為か、他人の声という違和感に僅かに意識が浮上し始める。けれど「リュセアが居る」という事を思い出すと同時に、浮上しかけたものはまたゆっくりと眠りに落ちようとしていた。

布団の中でもぞもぞと動きながらベッドへ背を向けたソレイエルは、再び静かな寝息を立て始める。

「んう……………」

「は……………い、や……………いやああああッ!」

「……………うおおお!」

悲鳴を上げながら起き上がったリュセアのその声に、床で寝ていたソレイエルが驚いて跳ね起きる。何がなんだか分からないまま寝ぼけている頭を振り、被っていた布団を跳ね飛ばしてリュセアの様子を見た彼は、伸ばした手を途中で止めた。

胸元を押さえて荒い息を繰り返し、それでもかと言うほど目を見開き虚空を見る彼女の様子は、どう考えても只事ではない。ソレイエルが触れる事を躊躇い、伸ばしたまま行き場をなくしたその手を目の前で揺らしたり、鼻先で叩いてみても反応はなく、彼は小さく舌打ちをした。

「なんなんだよ、ったく……………」

ため息を吐き立ち上がったソレイエルは、作業機の椅子に座る。そして机に肘を付こうとして腕に何かが当たる感触に、彼ははっとして振り向いた。

「ん? ………………つて、あ!」



腕に当たったのは、何時もならば落とすと危ないからと言って机の中央付近に寄せているはずの、薬草を粉末状にするのに使う陶器のすり鉢だった。運悪く片付けるのを忘れていたそれが肘に当たって机からズレ落ち、床に落ちて少し甲高い派手な音を部屋に響かせた。

音と僅かな振動に耳を押さえて身を縮こませたソレイエルは、そつと眼を開いて陶器の落ちた机の向こう側を覗き見る。白い陶器は、細かい破片を散らしながら大きく欠けてしまっていた。

「うわぁ……あちゃー……」

大きく破損してしまったそれは、もう作業に使うことは出来ないだろう。朝一に新しいのを買いに行かなければ調合が出来ないと、諦めた様子で屈んで破片を集めていた彼は、視線を感じて顔を上げた。

虚ろな表情のままソレイエルを見るリュセアは、息は落ち着いているものの心ここにあらずといった様子で不安になる。けれど自分の事を見ているのは間違いないと、ソレイエルは確信していた。ゆつくりと、視線を外さないまま拾った破片をゴミ箱に捨てて、ベッドへと向かう。

ベッドの端に腰掛ける。ぎし、とベッドがきしむ音がしたが、リュセアの反応はなかった。そつとその頬に触れると、リュセアが僅かに眼を細める。

「……リュセア？」

名前を呼ぶと彼女は僅かに表情を変え、小さく首を傾げた。開かれた口から漏れた言葉に、ソレイエルは眼を見開く。

少し迷う様子を見せたソレイエルは意を決したように笑みを浮かべ、彼女をベッドに寝かしつける。

「眠りなさい、リュセア」

「……はい」

リュセアが言われたとおり、素直に眼を閉じる。その閉じられた目蓋の上にそつと手を置き、ソレイエルは息を吐いた。

Dollは、『動く人形』だ。一般では小間使いとしての安価なDollが溢れている所為か、壊れれば簡単に直ると思っている人が過半数を占めている。けれどそれが通用するのは、造りが単純で基本的な機能　与えられた簡単な命令にのみ従う　しか持ち合わせない量産型の自動人形<sup>オートマタ</sup>だけだ。『Twinkles』のような高性能のDollは高級玩具と呼ばれ、人間と変わらない動きや発声をさせるために内部はどれも複雑で、人形師やDollの構造に詳しい修理師以外では簡易な修復さえ不可能だと言われている。まして学習によって自我を持つていくような特殊な自動人形<sup>オートマタ</sup>ともなれば、その機能の復元は『人形師ギルド』の中でも難しいと、Dollに携わる者なら誰もが知っていることだった。

その中でも特に、その構造や原動力の機構が明かされておらず、誰も修復する事は不可能だろうと言われているシリーズの内の1つが、『Twinkles』だ。その為、機能障害が出れば破棄するしかないと言われている。

(……感情を持つからこそ、機能障害が命取りなんだよ)

苛立ったように髪をかき上げ、ソレイエルは息を吐いた。『Twinkles』の人形師は姿を現さない。現すわけがない　自分の置かれている状況を、理解しているのだから。

眠っているリュセアの寝顔はどこか安心していうようで、湧き上がってくる感情にソレイエルは拳を握る。苛立ちと、悔しさと、怒りでじつとして居られる自信はなかった。それでも感情任せにならなかったのは、今そうすべきではないと分かっているからだ。

「リュセア」

そつと髪を撫でる。そしてその額に手を置くと、その上に自分の額を乗せて目を閉じた。

輝石は外部からの魔力干渉を殆ど受け付けることはない。それは輝石自体が魔力を帯びた物であるため、内部の魔力と外部からの魔力が反発してしまうからだ。『Twinkles』はそんな輝石の魔力を動力源としている稀有なDollであり、だからこそ扱いが

難しいとも言える。

人間で言えば、この原動石は心臓であり脳でもある。機能障害はその原動石に何らかの方法で干渉しなければ、修復する事が出来ない。

そしてその術は、ドールマスター人形師しか知らない 表向きは。

（閉じた貝を、無理矢理こじ開けんのは至難の業……何が原因だ。もしかしてライアンと同じ……？）

青い髪の青年を思い浮かべて、ソレイエルは息を吐く。そのときの事を思い出したから、というわけではなかった。

Dollの多くはマスターの死に直面する。それは病による物であつたり寿命による物であつたりするが、そういった緩やかな死でDollが錯乱したり、機能障害を起こしたりする事は稀だった。

ただ例外なのは、他殺や自殺によるマスターの死だ。そういった場面に直面したDollは、殆どの場合記憶やそれに関連する機能

主に五感 に関して障害を起こし、錯乱状態になってしまう。それを、ソレイエルは何度も見てきていた。

Dollにとって、マスターという存在は世界であり、唯一無二の存在だ。それが他者の悪意によって失われるという事は、Dollにとってどれほどの衝撃になるのか。その影響はそれに行き合った瞬間に出てくる場合もあれば、こうして何らかの出来事を切っ掛けとして出てくる場合もある。

リユセアの場合は、後者だ。時間が経ってからの影響は原因が解らない分、厄介である事には違いない。

ドールマスター人形師は自分の創り出したDollを我が子のように思っている。この場合、自分の部屋のような何の設備もない場所に置くのと、“親”だからこそ少しの異変も洩らさず拾い上げ“治療”してくれるドールマスター人形師の元へ連れて行くのと、どちらが良いのかとソレイエルは迷う。

「……んなことしても無駄か」

昔、青い髪のDollを保護した時も、ドールマスター人形師には知らせなかつ

たのに。

浮かび上がる雑念を払拭するように息を吐き、意識を集中させる。軽く押し戻されるような抵抗の後、原動石と繋がる感覚にソレイエルは思わず呻いた。

幻肢、と呼ばれるものがある。無いはずの四肢を、まるで存在しているかのように感じてしまう、というものだ。今のソレイエルは原動石と繋がる事でその存在しない“もう1つの身体”の感覚を得てしまい、本来の身体と両立しようとした結果、自律神経が上手く働かずに強烈な眩暈と吐き気に襲われていた。それは以前リユセアの前動石に干渉した時よりも強く、今すぐ切り離したいと思うほどだ。

歯を食いしばりそれに耐えながら原動石に魔力干渉をしていたソレイエルは、暫くしてそのまま崩れるようにベッドの下へと落ちる。胸元の服を握り締めて呻きながら薄く眼を開くと、息を整えるように深呼吸をして額に右手の甲を当てた。

身体中がだるい。天井が回っているように見え、胃の辺りもムカムカして吐きそうだった。

「マスター！」

音はあまり大きくないものの、部屋の戸が勢いよく開けられる。ソレイエルが視線をゆっくり動かすと、青い髪が視界に入った。呼んだ覚えもない彼が来るとは思っていなかっただけに、陶器の割れる音が響いたのだろうか。落ちた時に響いたのだろうか、そうしたら下からも人が来るかも。などどぐるぐると思考が回る。

だがそれ以上に動けそうにない彼は、ゆっくり息を吐いて再び目を閉じる。その様子に異変を感じたライアンが足音も荒く近付くと、ソレイエルは小さく呻いた。

床を通して頭に響く足音が、眩暈と頭痛を倍増させるような気がした。

「……ライアンか」

「どうされたのです！ 汗だくではありませんか！」

「ご、ごめ…… あんま大きい声、出すな…… 吐く……」  
「っ」

何かを言いたそうだったライアンの表情が、ソレイエル言葉でさつと青くなる。踵を返した彼が再び戻ってくると、その腕には氷水の入った桶が抱えられていた。黙ったままその縁に掛けていた白い手ぬぐいを氷水で絞ると、ライアンはソレイエルの横に膝を付き、その汗を拭いた。

ひんやりとしたその感触が気持ちいいのか、ソレイエルはほっと息を吐いて身体の力を抜く。

「……アレをしたのですか」

「分かってて訊くなよ……」

「確認をしただけです。無茶をされましたね」

そう言いながらライアンは軽いため息を吐いた。再び氷水で手ぬぐいを絞ると、少し迷ってからソレイエルの額にそつと置く。

ソレイエルがこうやって動けなくなるほど体調を崩すのは滅多にない。彼の気だるそうな表情にふと自分の“マスター”の姿が浮かんで、ライアンは頭を振った。そして氷の浮かぶ水面を眺めながら再び息を吐く。

忘れるつもりはなかった。ただ、思い出すのが辛いだけで、それに今は“喪ったもの”ではなく目の前にあるものを優先して、大切に、大事にしなければと、ライアンは水面に揺れる自分の顔を見て思う。

「……ライアン」

「はい」

唐突に呼ばれ、はつと顔を上げてソレイエルの顔を覗き込もうとしたライアンが返事をするのと、ソレイエルがその首を両腕を絡めて引き寄せるのが殆ど同時だった。手櫛を入れるように髪の中に手を入れ、ライアンの顔を引き寄せると、ソレイエルは僅かにひんやりとするその頬に擦り寄り息を吐く。

その抱き寄せている腕の力が少しずつ緩むのを感じ、ライアンの

手が戸惑いながらソレイエルの髪に触れる。

「マスター？」

「……キミの原動石<sup>いし</sup>が、安定してて……助かる……」

軽い音を立ててソレイエルの腕が布団の上に落ちる。耳元で聞こえる僅かな、規則正しい寝息にライアンはほっとした様子で上半身を起こした。

ソレイエルが原動石に干渉した感覚はない。だがソレイエルのように輝石の魔力に干渉できる力を持つ者にとって、安定した波長を放つ輝石は近くに居るだけで落ち着くんだという話は以前聞いたことがあった。だがそれは同時に、リュセアの原動石が安定を保っていない　つまりリュセアの精神が安定していない　ということになる。

起こさないようにソレイエルを布団へ移動させると、ライアンは眠っているリュセアの隣に腰を下ろした。

規則正しい寝息は、D o o l l の排熱機能が正常に機能している証拠だ。だがそれは原動石の安定を示す指標にはならない。むしろ表面上だと安定して見えてしまう方が問題だった。

「……僕の場合は、どうだったのでしょうか……」

以前のマスターの死からこの部屋で目覚めるまでの記憶を、ライアンは持たない。覚えていないわけではない　覚えていたくないから、記憶の奥底に押し込んで思い出さないようにしているのだ。

同じようにマスターを喪い、そしてソレイエルに拾われた妹。同じ境遇であるリュセアに対し、ライアンは自分の影を重ねないで居られるはずがなかった。だが同じ人形師<sup>ドール</sup>に創られた『Twinkles』であっても、互いに交流する事は無いだろうことを前提とされている以上、出来る事は限られている。

そつとリュセアの髪に触れ、ライアンは息を吐いた。暫くそのままだった彼は、髪が揺れたのを感じてふと顔を上げる。換気の為か少し開いている窓と、僅かに明るくなり始めている空が見えて小さく声を上げた。

樹海沿いは夏季でも涼しい風が流れてくる。そのため貴族達は樹海の傍に別荘を持つことを夢見るというが、雨期を抜けるまでの樹海の風は肌寒いを通り越して身震いをするほどだ。特に明け方はまるで寒季のような気温の下がり方をする。

自身の吐く息が僅かに白いのに気づいた時には、ライアンは反射的にソレイエルの横に膝を付いていた。

「マスター」

ソレイエルの頬にかかる髪を指でそつと退ける。指先から僅かに伝わる体温が思ったよりも冷たく、風邪を引くんじやないかと思わず不安になるほどだった。

跳ね飛ばされたままの布団をソレイエルに掛けると、ライアンは静かに窓を閉めた。この部屋には時計がないため正確な時間を知る手段はないが、もう少しすればソレイエルが日課としている、樹海へと薬草の採集に出かける時間になるだろう。

ソレイエルが、安心してくれる、喜んでくれる事をしたい。“本当に喜んで” くれなくても良い。

（お父様が、唯一懇意にしていた貴族へ贈られた『Twinkles』……あの時の、自動人形<sup>オートマタ</sup>）

あの透き通った紅色の瞳を、見たことは無かった。けれど髪の色には見覚えがあつたのだ。『Twinkles』を持ち主となるマスターの元へ届けるのが、マスターを亡くした『Twinkles』の仕事だ。例に漏れることなくリュセアをマスターの元へ送り届けたのは、他でもないライアン自身だった。

リュセアをここにずっと置いておく事は、良し悪しの問題以前に不可能だろう。だが確かにソレイエルの言うとおり、見捨てる事は出来ない。そんな事は、赦されない。

姿無き“父” その姿も、声も、外へと送り出されたDollは覚えていない。『Twinkles』の名を持つ自動人形<sup>オートマタ</sup>は、完成後に“父”の姿を見ることなく送り出されるためだ。その時まで“父”の愛情を一身に受けていた記憶だけを原動石に遺し、だから

こそ『Twinkles』は“父”を盲目的な程慕い、焦がれる。

“父”を想い慕う気持ちと、マスターであるソレイエルのことを思う気持ちの間で、ライアンは答えを出せないまま息を吐く。

マスターの為に全てを捧げる『Twinkles』は、全てにおいて人形師の願いを優先とする、矛盾を孕むDollだった。例えばそれぞれにその自覚は無いとしても、原動石に遺された記憶が彼女達を突き動かすのだ。

それなのに、2人の間で揺れてしまう自分もどこか壊れているのではないかと、ライアンは自嘲気味の笑みを漏らした。

（僕も、一度は“壊れた”身ですから、ね……）

「……だからといって、マスターを喪った事に縛られて良いとは思いません」

枕元から覆いかぶさるようにリュセアの頭の両脇に手を付いたらイアンは、普段は使うこともない低い声色で囁く。

自分も、マスターを奪われた<sup>オートマタ</sup>自動人形だ。この目の前で奪われ、蹂躪され。

原動石が割れそうに痛い。けれど“あの時”に比べれば、耐えない痛みではなかった。

「<sup>いま</sup>現在を見るのです。貴女の周りには、貴女を想ってくれている人が居るのを、忘れてはいけません。それでも、辛くて、耐えられず、その“心”を閉ざそうとするなら……お父様を、思い出しなさい。何よりも大切なあの方が悲しむのを……貴女も見たくは、ないでしょう」

ライアンの問いかけに、リュセアがゆっくりと瞳を開いた。虚ろだった瞳は僅かに正気の色を戻し、小さく開かれた口元が言葉を紡ぐ。

その微かな声を聞き取ったライアンは微笑を浮かべ、優しくその頬を撫でた。



ガタゴトという僅かな物を動かす音で目を覚ましたソレイエルは、  
気だるげな動作で寝返りを打つ。日の傾きや星の位置で刻を見るエ  
ルフ独特の時間感覚で、既に薬草採集の時間などとくに過ぎてい  
ることを知っていた彼は、昨晚の影響で思考も身体もともに動け  
るような状態ではない事も相俟ってか、今日はもうこのまま動く気  
にもなれなかった。

「寒い」や「眠い」は、既にただの言い訳に過ぎない。第一これ  
から気温が上がっていくのだから、寒いという理由はもはや言い訳  
にすらなら無いだろう。

だが兎に角寝ていたい、横になつていたいと思っているソレイエ  
ルは、その眠りを妨げる元凶　リュセアが目覚める事は無いだろ  
うと勝手に憶測し、ライアンだったら出て行かせようと思いながら、  
確認しようと僅かに目を開けて、固まる。

昔、吟遊詩人として各地を回っていた時に、とある国の宮殿に呼  
ばれたことがあった。その侍女は貴重な黒の染料で染め上げられ  
た衣服を着ており、ふんわりと広がる裾にレースの付いたスカート  
と、フリルエプロンが特徴的な独特の衣装だったのを覚えている。  
そしてその衣装が女性給仕人の衣装の原型と言われ、他国の侍女等  
の衣装にも一部取り入れられたと聞いたことがあった。

思わず身体を起き上がらせ、まじまじと見る。相変わらずの頭痛  
と眩暈はしたが、それが感じなくなる程度には混乱をしているよう  
だった。

「あ、おはようございます」

振り向いたリュセアが、身を起き上がらせているソレイエルに気  
が付いて笑顔で挨拶をする。赤と黒は色の組み合わせとしては良い  
が、リュセアのような薄紅色の髪ではどこか物足りない印象を受け  
た。だがデザインとしては良いのかもしれないと、混乱中の頭でソ

レイエルはぼんやりと思う。

呆けたまま動かないソレイエルを見て不安に思ったのか、リュセアがふわふわのスカートの裾を揺らして、手に持ったままの叩きを胸元で抱えるようにして首を傾げる。

「ソレイエル様、どうかしましたか？」

「……なに、その格好」

どうしてそんな服を着ているのかと訊こうとして、思わず短い言葉がついて出る。言い直そうかと一瞬考えたが、上手く言葉をまとめられそうになく、ソレイエルはそれを断念した。

その、少し突き放したかのような言い方が悪かったのだろうか。

リュセアはソレイエルの言葉を別の意味で捉えたらしく、黒いスカートを摘み上げて服を確認するように身体を捻り、自身の後ろの様子を見ながら少し不安げな表情になる。

そういう意味じゃない、とソレイエルは言いたかったが、代わりに短く息を吐くだけに留まった。

着ている服とソレイエルを見比べて、リュセアは軽く肩を落とす。

「似合いませんか？ ライアン様から頂いたのですが……」

「……」

そういえばアイツはあの後何時の間に帰ったのだろうと考え、ふと何かを思い出したソレイエルの表情が僅かに強張る。よく見ればその口角が引き攣っているのに気が付くだろうが、服装がおかしいのだろうかと思っているリュセアはそこまで見ていないようだ。

リュセアに譲っていたはずのベッドに寝かされていた事にも気付かず、ソレイエルは無言で布団を退けるとふらつきながらも立ち上がり、長いため息を吐く。

それにもまだ気付かないリュセアは、一通り自分の服装を確認してからようやくソレイエルを見る。

「昨日、掃除のときには埃が舞うから、服が汚れると困るでしょうと……あの、ソレイエル様？」

硬い靴音を響かせながら横を通り抜けていったソレイエルから何

かを感じ取ったリユセアは、困惑した様子で廊下へと出て行くその後を追いかける。ぶつぶつと聞こえるかどうかという声で何かを呟いているのが、訳も分からない不安を煽り立てる。

そのままりユセアが止める間もなく、無造作に隣部屋の戸を開けたソレイエルは、運悪くベッドに横になったばかりだったライアンを見つけると肩を怒らせて近付いていく。

戸の開いた音に振り向いたライアンは、どこか気だるそうな表情で近付いてくる相手を見上げた。

「え……あ、ソル」

「ライアンツ！ てえんめえ……！」

その姿を見てほっとしたような、僅かに嬉しそうな表情を浮かべたライアンの顔が、ソレイエルの怒りの形相に凍りついた。

Dollは肉体的な疲れを知らない。だが人間で言えば精神的な疲れ、というものが存在している。一定期間の間に五感から得た情報を、『眠り』と呼ばれる行為で外部からの情報を閉め出して取捨していかねければ、溜まりすぎた情報に他機能が圧迫され、やがて全機能が凍りつき緊急停止する事になる。その為殆どのDollは、夜になると人と同じように『眠り』に就いて情報の整理と取捨をするように設計されていた。

『眠り』をせずに活動できる限界点は作者や固体によって様々ではあるが、もちろん量産型は規格が決まっているので差はない、平均して30時間ほどが限界と言われている。今のライアンは丸一日以上起き続けているため、限界に近い状態といえた。

そんな疲れて動きの鈍いライアンの上に馬乗りになったソレイエルは、相手の胸倉を掴んで怒りで引き攣った笑みを作る。掴みかけられたライアンは、ソレイエルが何に怒っているのかが分からず、僅かに怯えた表情で自分の上に乗っている相手の顔を見返した。

「あ……あの……？」

「誰が、ヒトサマのDollを、着せ替え人形にしていっつつたあー……！」

「ソ、ソレイエル様っ！ 落ち着いて下さいっ」

「ちよつと！ あんたたちなに騒いで」

大声に驚いてやってきたレミアが部屋を覗き込むと、ライアンの上に馬乗りになっているソレイエルの腕に、リュセアが懸命な表情で抱きついているのが視界に入ってきた。それを見て大きな瞳をぱちくりと瞬かせ、ぺちんと両手で自分の顔を挟むように頬を叩いた彼女は、この3人は何をしているのだろうと思考をフル回転させる。

レミアの記憶の中では、確かにソレイエルとライアンはかなり仲が良いし、ライアンが甲斐甲斐しく世話をしているのも見てきている。軽い文句も言う時はあるが、大抵の場合ライアンはソレイエルに対して従順である事に変わりはないかった。他のDollとマスターをよく知らないレミアにとって、そんな2人の関係は“そういう”関係であつてもおかしくないものだとか常々感じていたらしい。

頬を僅かに染め、レミアはため息ともつかない息を吐いた。

「あんたたちねえ……真昼間から、どうかと思うわよ？ リュセアちゃんもいるっていうのに」

「あのっ、レミア様、ソレイエル様を止めて下さい！」

「……何をどう見て、そう思ったんだアンタは」

ライアンを殴ろうとしたソレイエルの腕に、それを止めようと抱きついたままのリュセアが焦りの滲んだ声色で叫ぶ。だがレミアの台詞で気が抜けたのか、ソレイエルは殴ろうとしていた腕の力を抜いて、長いため息を吐いた。

リュセアの言葉にさらにきょとんとした表情になったレミアを見て、ソレイエルは軽く首を振ってライアンの上から退く。ベッドから降りた拍子にふらりとよろめいたのを、リュセアが隣で支える。

「……違うの？」

「止める、気持ちわりい……野郎同士で乳繰り合う趣味はねえよ」

「……ソル、機嫌悪いの？ それと、ちよつと顔色悪いけど、大丈夫？」

「……大丈夫だ。軽くシャワー浴びてくる」

大丈夫だと言う割には、歩みの覚束ないまま廊下へと出て行くソレイエルを見て、リュセアが慌てて追いかけていく。

部屋に戻ると箆笥に寄りかかりながら服を出している姿が見え、リュセアは駆け寄ってその手に触れた。

「んあ？」

思いもしなかったのか、驚いたように見返してくるソレイエルに、リュセアは笑みを浮かべて返す。そしてソレイエルの手が掴んでいた服を腕にかけるように持つと、ゆっくりと首を振った。

「私が、御用意します。ソレイエル様は先に湯浴みへ向かわれて下さい」

「いや、でも」

「お部屋の片付けをした時に、どこに何があるのか確認しました。

……無理をしないで、先に行つてゆっくりしててください」

「……」

無理なんか、と言いかけたソレイエルは、開きかけた口を嚙んだ。真つ直ぐ立とうとしたはずなのに、肩から壁へと身体が傾ぐ。激昂していた影響で頭痛や眩暈が吹き飛んでいただけで、実際に治つたわけではないのを彼は忘れていたようだ。

どうやら体調はまだ万全ではないらしいと認めたらしいソレイエルが、背中を壁に預けて両手を軽く挙げる。何かの拍子に階段を転げ落ちたときに、無傷でいられる自信が今はなかった。むしろ壁に手を付かずに階段を下りれるかどうか微妙だと、彼は思っているほど力の入らない足に触れて思う。

小さく息を吐いて苦笑にも取れる力ない笑みをリュセアに返し、壁に手を付きながらゆっくりとソレイエルは部屋を出て行く。それを見送った彼女は、ほっと息を吐いて視線を箆笥へと向けた。

湯浴みの用意は慣れていた。なんでも自分でやろうとするマスターの代わりに毎日していたのは、命令等ではなくただ単にその用意しようとする手に慣れがなかったから。家に昔から仕えているというお手伝いさんに色々と教えてもらいながら、拙いながら家の仕事

をし始めた頃を思い出して、リュセアは小さく笑いをこぼした。

着替えを用意していた手に、何かかざりと音のなる物が当たる。手探りで服の間に挟まっていたそれを取り出したリュセアは、あて先のない真っ白いその封筒を見て軽く首を傾げた。

「……？」

見覚えのある封筒だった。だがこの雑貨屋でも売られていそうなその封筒を、何処で見たのか彼女がよく覚えているはずもない。暫く見つめていたが、宛名の無い封筒が何故ここにあるのか、どうして隠すように仕舞われていたのかを知る事は出来なかった。

ふと首を傾げながら何気なく裏返したその封筒の、右下に書かれている名前を見て彼女は目を見開く。よく見慣れた文字で書かれた、決して忘れない名前。恐る恐る封筒を開くと、便箋が2枚綺麗に折り畳まれた状態で入っていた。震える指でそれを取り出そうとしてリュセアは息を吐いて封筒を閉じ元の位置 服と服の間へと戻す。他人宛の手紙を勝手に見ようとすると、彼女は筆笥の引き出しを閉めながら再度ため息を吐いた。軽く引き出しに頭をつけ、目を閉じる。

「……どうして……これが？」

小さく呟いて、リュセアは首を振る。考えるとどんどん深みに嵌っていきような気がして、彼女は深く息を吐いた。きっと、隠しているのは何か深い理由があるのだろうと思うしかなかった。

ふと手に持っていた着替えを見て、湯浴みに向かったソレイエルの事を思い出たリュセアは、早く服を届けに行かなければと筆笥から静かに離れた。廊下へと出て、部屋の戸を閉め振り向くと、向かいの廊下の壁に寄りかかっていたレミアと視線が合う。

どうしてそこに居るのだろうと考える間もなく、目の前の少女は組んでいた腕を解いて壁から離れる。あの、とリュセアが声をかける前に、レミアは息を吐いて言葉を放った。

「アタシたち、先に表にある食堂……『細石亭』に行ってるって、ソルに伝えてくれる？」

「え、あ……はい、わかりました」

戸惑った様子のリュセアから返事を聞いたレミアは、そのまま背を向けて軽く手を振りながら階段を下りていく。その後姿を見送りながら、彼女は僅かに首を傾げる。      様子がどこおかしかった、気がした。

余計なことを考えそうになる頭を再度振ると、リュセアはゆつくりと階段を下りていく。それから昨日レミアに教えてもらったおりの道順を思い出しながら廊下を進み、入り口に『貸切り中』と書かれている立て看板が置かれている宿場の利用客用の大浴場へと辿り着いた。

どうして貸切り中となっているのだろうと思いつながら、リュセアは立て看板の横をすり抜け、男湯の更衣室へと入る。

着替えを更衣室の中央にある棚の上に置き、リュセアはソレイエルの姿を探して更衣室をぐるりと見渡したが、まだ室内には誰もいなかった。落ち着かなくなりそうになるのを押さえて耳を澄ませば、大浴場の方から僅かに水音が聞こえ、ソレイエルはまだ中に居るのだろうと彼女はどこか安堵した表情で小さく息を吐く。

息を吐いてから、自分が再び置いていかれるのではないかという不安を感じていた事に気付き、リュセアは胸元の服を握った。

原動石の埋まっている場所が、熱かった。

「……ソレイエル様、お召し替えを御用意しました」

曇り硝子の戸を軽く叩いて声をかけると、中から聞こえていた水音が止まる。それからリュセアが踵を返して入り口側へ退くのと、ソレイエルが大浴場から出てくるのが殆ど同時だった。

硝子戸の脇にある、据え置き棚の棚に用意されている宿場のタオルを頭から被ったソレイエルは、乱雑に髪を拭いて息を吐いた。そのまま明らかに適当な手つきで身体の水分を拭き取っていくソレイエルの後姿に、リュセアは落ち着かない様子で組んだ手を解いたり、組み直したりを繰り返していた。

その視線が、ソレイエルの背中にあるものを捉え、止まる。

「……ソレイエル様、その痣は……？」

「痣？」

腰にタオルを巻いたソレイエルが振り向くと、リュセアは頷いて鏡を探し始める。どうやら手鏡を探しているようだったが、更衣室には壁に張られた鏡以外に置かれているものはない。

どうしようという困惑気味の表情で、リュセアはそれでも周囲を見渡した。

「背中に大きな……蛇のような痣が、あるのですが……」

リュセアの行動を見ていたソレイエルは、それにあぁ、と小さく呟いて笑う。その声に気付いたリュセアが動きを止め、不思議そうに見返してくると、彼は苦笑のような笑みで肩を竦めた。

「これはな、神獣の加護を持つ者の証拠ってヤツさ」

「神獣の？」

「っそ。樹海で生まれた子供に、たまーに神獣が気紛れに加護をくれるんだ。……オレはその中でも珍しい、神獣2体から加護を受けてる子供だったけどな」

どこか皮肉げな声色でそう言ったソレイエルに返す言葉が見つからないリュセアは、そのまま口を噤むしかなかった。

暫くして服を着たソレイエルの髪から水がまだ滴り落ちるのを見て、リュセアは新しいタオルを手に取り、少し背伸び気味にその髪を拭いていく。それに何か言いかけたソレイエルだったが、結局開きかけた口を閉ざしてされるまま任せることにしたようだった。

それから、どこからか取り出した櫛でソレイエルの髪を梳いたりユセアは、丁寧に髪を束ねて紐で止めた。自分で結うよりも少し高い位置にある紐に慣れないのか、ソレイエルは気にしたように何度か結わえた部分を触っては僅かに眉根を寄せる。

その様子を見て、リュセアはくすりと笑う。その仕草が、見慣れている少女とどことなく似ていたからかもしれない。

「いくら樹海の傍といっても、日中に日が出れば暑くなりますから。その方が首筋が涼しいと思います」



まだ納得しない様子で髪を触っていたソレイエルは、リュセアの言葉に手を止めて振り向いた。普段から服装を含めてそうだったことにあまり頓着をしていない彼は、言葉にならない声で暫く唸ってから、再び手で軽く結わえた紐に触れる。

「……そういふもん？」

「はい。あ、レミア様から伝言を預かっています。『細石亭』で待っている……」

その伝言を聞いたソレイエルが僅かに不機嫌そうな表情になる。そして息を吐くと、仕方が無い、というように腰に手を当てて肩を落とした。

昨日の食事は差し入れも含めて全て『細石亭』のものだった記憶のあるソレイエルは、今日も朝からか、とウンザリした様子だったがそれを知らないリュセアは微笑を浮かべながら、どうしたのだろうと言うように僅かに首を傾げていた。

耳の後ろ辺りを掻いて、ソレイエルは短い息を吐く。

「アイツあそこで食う気満々かよ……わかった、ありがとなりュセア」

「いえ……あの、私もついていっても構いませんか？」

「ああそれはかまわねえよ。この辺りなら出歩いてても大丈夫なはずだし。……あつと、でも街には出るなよ？」

「はい、分かりました」

更衣室を出て行こうとした足を止め、真剣な表情で振り向いたソレイエルの言葉に、リュセアもしつかりと頷いて答える。それを確認すると、ソレイエルは満足げな笑みを浮かべて頷き返し、更衣室を出た。

真偽を疑うような情報しか手元にない今、信頼の置ける的確な情報<sup>の</sup>を集めるしかないソレイエルは思っていた。伝手が無いわけではないが、その相手とはあまり接触を取るべきではないと本能が告げる。

今できることは、リュセアをこの村から出さないようにする事だ

けだった。

主人を失ったDollにとっての安住の地は、この世界にはとても少なく、そしてとても狭かった。

## 紅色人形 03

『細石亭』の戸を開くと、戸に付いている鈴が鳴って店内に居る者たちへと来客を告げる。店内へと入ってきたソレイエル達に、レミアが気が付いて手を振った。その傍らにはテーブルに突っ伏した状態のライアンの姿もある。

給仕の娘に料理を頼んだソレイエルは、当たり前のようにそのテーブルの空いた席に座る。その隣にリュセアが座ると、レミアが苦笑を浮かべて話しかけた。

「ごめんねリュセアちゃん。ソルってばホント人を寄せ付けないって言つか、あんまり人の言うこと聞いてくれなくて困っちゃうわよねー」

「根無し草に親切すぎんだよ、キミが」

「あらっ。人に親切にするのは当たり前のことよー？ ホント、ソルはそのひねくれた性格なんとかしなさいよね、もうー」

「あっあのっ、大丈夫ですレミア様。ソレイエル様はよくしてくださいますし……」

頬を膨らませて怒るレミアに、リュセアが困ったような笑みを浮かべて弁解をする。実際に、リュセア本人に対するソレイエルの対応は今までのとだいぶ違うと分かっているのか、レミアもそれに対して否定しようとはしなかった。

だからこそ彼女の「気に入らない」という感情の、その矛先が向けられているソレイエルは、恐らく気付いていないだろう。

昨夜の部屋の話をとってもそうだった。確かに親切の押し付けだと分かっただけはいたが、あんな風に無碍にされるとするのは、それでも怒りたくなるのだろう。それなのに来たばかりのリュセアには気を許している様子が、さらにその怒りを助長させているのかもしれない。

2人、というよりもソレイエルとリュセアのマスターは、本当は

どういう関係なのか、気になるが訊くことも出来ない。リュセアが何も知らないのは明らかで、彼女に訊く気にはまったくなれなかった。それでなくとも「マスターを失った」ショックを引き摺っているのに、下手に負担をかけたくないというのが、レミアの本音だった。

長い溜め息を吐き、レミアはテーブルに肘を付いて組んだ手に顎を乗せる。苛々していても仕方が無いのに、それを抑えることができない自分にも少し呆れてくる。

「……根無し草って、あんたここに来て何年経つてると思ってるのよ」

「10年だろ」

「12年よ。本当の根無し草なら、一箇所にそんな留まらないでしょ」

「仕方ないだろ。パトロンとの約束なんだよ、国から出るなっ」

「……腕だけは確かだものね、ソルは」

腕だけは、の一言にむっとした表情になったソレイエルは、運ばれてきた料理をつつきながら眉根を寄せる。レミアに何も言い返さないのは、言い返す言葉が見つからないからだ。

微妙な空気に居辛さを感じたリュセアが、なにか話題を見つけようと視線を彷徨わせる。その視界の隅で何かが動くのが見えた彼女はそちらに視線を向けると、気だるげな様子のライアンと目が合う。テーブルに伏したまま髪をかき上げたライアンは息を吐いて、再びぐったりとテーブルの上に突っ伏した。

「……うあー……まだ少し、耳が……」

その声に気付いたソレイエルが、冷やかな眼でライアンを見る。その眼はどこか軽蔑を含んでいて、見られていなくても背筋がひやりとするほど冷たい。ライアンの隣に座っていたレミアが僅かに引き攣った苦笑を浮かべて、その青い髪を撫でた。

口の中のものを飲み込んだソレイエルが、箸を持たない方の肘をテーブルに付いて、わざとらしく息を吐く。その音に肩を跳ね上げ

たライアンは、怯えたようにソレイエルを覗き見た。

「てめえの好みでリュセアを遊ぶんじゃないよ、このロリコン」

「うー……リュセアさんは、そんな歳ではないでしょう?」

「んじゃシスコン。変態兄貴」

その言葉にライアンは言葉を詰まらせて、唸りながらがつくりと脱力した。確かに20歳前後の姿をしているリュセアに対して「ロリコン」と言うのは、その意味からして間違いではある。だが「シスコン」と言われては何とも否定しがたく、かといって肯定するのどこか抵抗感を感じて、彼は何も言うことが出来なかった。

殺気に近い冷えた空気を周囲に撒き散らしているソレイエルに、どう言えば許してもらえるのか悩みながら、ライアンは小さく息を吐いた。いくらなんでも“マスター”である人に嫌われるようなことは、出来れば避けたい。

なんとか言い訳を考えようとしたが、上手い言葉は見つからない。散々唸った挙句、ライアンは大きく息を吐いて考えるのを放棄した。

「……………僕は、そういう趣味は、ありません」  
「へーえ。　　どうだかな」

「まあ、まあ。あんたたち喧嘩も程ほどにしなさいよー」

苦笑しながら2人の間を取り持とうとしているレミアも、少しだけライアンの言い分も理解できるからか、酷く責めるソレイエルから少しは庇ってやりたいという気持ちがあった。リュセアはここに来たばかりで、着替えの服などをまだ用意できていないのだ。とりあえずでもいいから、別の着れそうな服を着て、着替えの用意ができるまでは出来れば服を汚して欲しくないと思う。

けれどもソレイエルの気持も分からなくはない、とも彼女は思う。ソレイエルは何故か、メイドや侍女というものに嫌な思い出でもあるのか、基本的に彼女達に近付こうとしないのだ。それなのに朝、眼が覚めたら目の前にメイドが居た。　　なんて、ソレイエルにとっては悲鳴を上げて逃げたかったに違いない。そう思うと、ライアンに怒りをぶつけたくなるのも仕方が無いのではないか、と容認して

あげたい気持ちにもなる。

ただ、ソレイエルを待つ間にライアンの半分泣き言に近い愚痴を聞いていた所為か、ソレイエルが責めているのは可哀想としかレミアには思えなかった。

「とりあえず、さ？　ライはソルを心配して、朝まで付き添ってくれてたつて言うし。悪気はなかったと思うわよ？　まー、リュセアちゃんにメイド服を着せたのはアタシ的にもどうかと思うけど、そのぐらい許してあげなさいよ」

「うつせーな……朝起きたら目の前にメイドが居たんだぞ。オレの頭を腐らせる気が……ッ」

「え、腐るんですか……？」

「いや、リュセアちゃん、そーいうことじゃないのよ」

それほどリュセアのメイド服姿が嫌だったわけではなかったのかと知り、あはははと腹を抱えて笑うレミアを睨みつけるが、効果がないと知ってソレイエルは机に突っ伏し唸る。どうも今、彼女には勝てそうに無いと、白旗を上げたようだ。

その横ではライアンがはぁ、と短い息を吐き、机に肘をついた状態で心なしか残念そうにリュセアを見た。

「……お似合いですたのに」

「てめえ、まだ言いやがるか」

「いやーん。ソル、怖い声出さないの」

「レミア、気色悪い声で騒ぐなよ……」

いいじゃない、とけらけら笑いながら、レミアが席を立つ。彼女の今日の服装は、動きやすい革の上着に厚手のズボンを穿き、硬い靴底の革のブーツを履いている。ウエストポーチをつけて、まるでどこかに探検にでも行くかのような出で立ちだ。

昨日とは全く違う服装に気がついたリュセアが、不思議そうに首を傾げてそれを見る。ソレイエルとライアンは特に気にした様子ではないことから、2人にはその理由が分かっているらしい。

リュセアの視線に気が付いたレミアが、少し笑って軽く首を傾げ

た。

「どうかした？」

「あの……レミア様は、どこかへお出かけですか？」

「ああ、この格好？ うん、お仕事よ。父さんの手伝いがあるの」

「お仕事……」

「うんそう。父さんの仕事は一族の誇りよ。なんといっても、この鉱山の主だからね」

そう言つて、彼女は自慢げに胸を張り、何も知らないリュセアに語り始める。

レミアの家系は、この国が建国されて間もない頃にこの鉱山を発見した、とあるドワーフの直接の子孫なのだという。その際に初代皇帝より鉱山の管理を任され、以後は代々の家長が鉱山を守っている。レミアの兄弟は兄と姉が1人ずついるらしいが、その兄が鉱山主を継ぐ事になっていて、姉は嫁いでしまったから、自分は残された副業の宿場を切り盛りしていくのだと、彼女は嬉しそうに言う。

隣でそれを黙って聞いていたソレイエルが、少し間をおいて口を開いた。

「兄貴より、キミの方が家業にあつてんじゃないの？」

「んー？ ううん。だめよ、アタシは。鉱山好きだけど、あれは性に合わないわ」

その答えに何か言いたそうな、不満を隠さないソレイエルの表情に苦笑して、レミアは席を立った。そして笑みながらリュセアに「じゃあ、またね」とウィンクをし、彼女は椅子の脇に置いていた荷物を持って食堂を出て行く。

戸が鈴を鳴らしながら、軽い音を立てて閉まる。

残された3人は、朝からの気まずさからか、誰も口を開こうとしない。黙々と朝食を食べるソレイエルと、顔を合わせようとしないうまま黙って珈琲を飲んでいるライアンを、リュセアが居心地が悪そうな表情で見比べる。この何とも言えない空気の悪さは給仕の娘にも伝わるのか、彼女も苦笑気味の笑みでカウンターの椅子に座つ

ていた。

暫く経って、先に動いたのは、料理を食べ終わったソレイエルだった。持っていた箸を平皿の横に置くと、コップに残っていた水を一気に飲んで、わざとらしく大きく息を吐いた。

少しその音に驚いたように肩を跳ね上げたリュセアに気付かないまま、ソレイエルは小さく舌打ちをする。その視線は、食堂の壁に掛かっている時計を捕らえていた。

「仕事。行ってくる」

不機嫌そうな声でそう言い、ソレイエルが立ち上がる。それにほっとした表情でリュセアは息を吐いた。

「はい。いつてらっしゃいませ、ソレイエル様」

無意識にそれに続いて立ち上がるうとしたリュセアを、ライアンが無言のまま手を上げて制した。きょとんとした表情で見てくるリュセアに対して、彼は何時もの穏やかな笑みを浮かべていたが、その眼は決して笑っていなかった。その冷たさにリュセアは何かを言いかけて、そのまま黙って椅子へと戻る。

リュセアが大人しく座ったのを確認し、ライアンは椅子から立ち上がった。

「それでは、僕も出かけるとしましょう」

口調は何時もと変わらないものの、その声色は硬い。何か気に障るようなことでもしたのだろうか、ただただリュセアは困惑するしかなかった。

もしかしたら、仕事の邪魔をされると思われたのだろうか。今部屋に戻るのはいけないのだろうか。出来れば、1人では居たくない。でもこの人たちにも嫌われたりしたくない。

不安と困惑がぐるぐると回って、リュセアは落ち込んだ様子でソレイエルをそっと盗み見た。彼はライアンのその態度に慣れているのか、腰に手を当てて「しょうがないヤツだなあ」と言う表情で苦笑していた。それで嫌われたりしているわけではないとリュセアは安心したが、それでもライアンの急な態度の変化は不安だった。



頼ってもいいと思っていた人の態度の豹変は、絹綿に包まれるように暮らしていたリュセアにとってショックは大きかったようだ。

「……お2人とも、お気をつけて」

幾分か暗い声で言うリュセアに、ソレイエルはぼんぼんとその頭を撫でる。

「ん、ありがとな。んじゃリュセアは……もう少ししたら部屋に戻って、できるだけ外に出るなよ？」

ソレイエルの言葉にこくん、と彼女が頷くのを確認すると、2人は連れ立つように食堂を後にする。鈴の音を響かせながらパタン、と音を立てて閉まる戸に、リュセアは殊更落ち込んだように肩を落とした。

気配が遠ざかっていく。1人残された孤独に、寂しさがこみ上げてきたように、リュセアはスカートを両手で握った。

「大丈夫？」

物が置かれた音とその声にはっと顔を上げると、給仕の娘がお茶の入ったコップを目の前に置き、空いたお盆に空になった食器を乗せているところだった。彼女は食器を片付けると、戻ってきてリュセアの正面の椅子に座った。

「2人とも、心配しているのよ。この街は見た目以上に物騒だから」

「……物騒なの、ですか？」

「ええそうよ。特にあなたたちお人形さんにとっては、とても怖い街だわ」

そう言って微笑む彼女に、リュセアは困惑するように口元に手を当て視線を彷徨わせた。

ソレイエルはそんな事を一言も言わなかったが、ライアン態度からしたら、もしかしたら本当にそうなのかもしれない。

でもそうだとしたら、どうして2人は自分をここに1人残したのだろう。不思議に思っただけで給仕の娘を見ると、人を安心させるような微笑を浮かべて、「大丈夫よ」と言った。

「境界のこちら側は、樹海もあるから安全よ。お人形さんの脅威は、

境界を越えないから」

境界とは何のことなのか、リュセアが尋ねようとしたところで彼女は椅子から立ち上がった。戸の鈴が、軽やかに来客を告げているのにリュセアが気付いたのは、その直後だった。

「もう少ししたら宿場へ戻っても平気よ。それまでごゆっくりどうぞ」

接客用だろうか、満面の綺麗な笑みを浮かべてそう言った給仕の娘は、注文をとる用意をするためにカウンターへと戻っていった。

そのまま真っ直ぐ街へ出るというライアンと別れ、ソレイエルは一旦樹海へと向かう。街道の脇にある獣道のような細い道を少し進んだところに、人目を憚るように建てられている2階建ての家が、ソレイエルの本当の“仕事場”だ。

暫くその外観を眺めていたソレイエルは、軽い息を吐いて扉へと向かった。壁に蔭を這わせ放題になっているその建物の、扉に二重にかけられた鍵を外し、中へと入る。

樹海の中に建っているだけあって、建物内の空気はひんやりとしていた。

「……消毒薬は良いとして、化膿止めと痛み止め…… ったく、あれだけじゃ何が必要なのかわかんねえよ」

机の上に無造作に置かれている手紙の文字を見て、ソレイエルは再度溜め息を吐いた。

負傷の程度しか書かれていない紙面から必要な薬を見繕うのは、至難の業だ。考え得る中での最低限必要なものといえば、傷の化膿を抑える薬と、痛みを取る薬、そして発熱した場合の解熱剤ぐらいしか思い当たらない。他に解毒は要するのか、またその種類はどれな

のか、縫合処置をしているなら塗り薬は必要なのか、ほとんど想像が付かなかった。

棚に何枚も重ねられている、折り目の付いた厚紙を組み立てて作った箱を手紙の上に置き、ソレイエルは居間に当たるその部屋から廊下へ出て、階段を上がる。2階は2部屋に仕切られており、僅かに考えてからその左の部屋に入ると、彼は咽るような薬草の香りに僅かに眉根を寄せ、溜め息を吐いた。

この部屋は長期間薬草を保管するために、薬草を大きな瓶に入れて栓をしたものを、部屋を埋め尽くすような勢いで整然と立ち並ぶ棚にその効力ごとに区分けされて並べられている保管庫だった。棚全体に掛けられている防腐と防湿の防護魔術を発動させ続けるために、貴重なルビーで精製された《オーブ》を媒体として魔術を維持させていたが、どうやらこの薬草独自の独特な香りまで抑えることは無理だったようだ。

諦めたようにソレイエルは苦笑気味に息を吐くと、棚に保管されている瓶から、乾燥させてある薬草を何種類か引き抜いて束にした。そして同じようにして束にしたものを3束片手に持つと、隣の部屋に入ろうか迷った末に階段を下りて1階へ戻る。そして元の部屋には戻らず、ソレイエルは廊下の奥の扉へと向かった。

奥の部屋は、調合に必要な機材が一通り揃えられている調合室になっていた。小さいものならそれほどの値にはならないが、部屋の中央に置かれた精製機や壁沿いの台に置かれている機材は、それだけでもかなりの値になるものだ。

一介の薬剤師が持っているには分不相応といえるだろうそれらを、何故辺境とも言える村に住むソレイエルが持っているのか。本人以外にそれを知る由もない。

奥の椅子に座ったソレイエルは、机の上にある道具を使って手馴れた動作で薬草をすり鉢に入れて細かく砕くと、測りで重さを確認しながら必要な分の薬を調合していく。そして机の引き出しから包み紙に使う薄い紙を数枚取り出すと、匙で適当な量を数回乗せ、丁

寧にそれを包んだ。

暫くして3種類の色の違う薬包を作り終えると、ソレイエルはそれを形が崩れないように籠に入れ、居間へと戻っていく。そして机に置かれたままだった厚紙で作った箱に、薬包同士が混ざらないよう仕切りを入れると、色を間違えないように薬包を詰めていった。

最後に薬包の色と中身の種類を明記した紙を折り畳んで箱の隅に入れると、仕事の終わりとなる。箱の蓋を閉めると、真剣な表情でいたソレイエルの顔に、ようやく安堵の色が広がった。

机の下に仕舞っていた椅子をその背を引いて出し、座る。壁に掛けられている時計の、振り子と歯車が動く音だけが響く中、その時間を確認したソレイエルは息を吐いた。

窓の外を見ると、樹海に木々に遮られた日の光は、細くこまやかに大地へと降り注ぐ。時間感覚を奪うかのようなその景色は、まるで全く時間の流れの違う、別の世界へと紛れ込んだかのような錯覚に陥りそうだった。若しくは樹海そのものが、別の世界への入り口になっているのかもしれない。

緩やかな時間の流れに、うつらうつらと眠気を誘われながら、ソレイエルは椅子の背にもたれた。あの馬車が来るのは、昼を少し過ぎた頃のはずだ。このまま誘惑に負けてしまえば、きっと時間に間に合わなくなる。

振り子の動く音が、部屋に響く。規則的に聞こえてくる音が、心地良い眠りを連れてくる。

突然ソレイエルが、椅子が動くほどの勢いで跳ね起きた。いつの間にか寝てしまっていたのか、時計の長い針が既に2週してしまっているのを確認すると、彼は慌てたように壁に掛けられているカバンを肩から引っさげ、薬の入っている箱を掴むと慌てたように家を飛び出た。その際に一瞬動きを止め、冷静に扉の鍵を掛けて施錠を確認すると、短く息を吐いて細い獣道を駆けていく。

街道沿いの樹の陰に一旦身を潜めると、ソレイエルは上がった息を整えるように深呼吸をした。

見上げれば雨期には珍しい、からつと晴れた青空。樹海から吹き抜ける風は適度な温度と湿度を持って、ひやりと肌を掠めていく。そういえばもうすぐ雨期も抜けるのかと、ソレイエルは独り言ちた。ソレイエルは空を見ながら呼吸を整え、息が落ち着いたのを確認してから街道を見る。丁度先日と同じ馬車が街道を走ってくるのが見えて、ソレイエルはほっとしたようだった。

馬車が何時もの位置に止まる。彼は手に持った箱を確認すると、気配を殺しながらその戸へと近付いた。

手の甲で軽く戸を叩く。それに応じるように僅かに開かれると、ソレイエルは相手の確認をせずに箱を中へと滑り込ませた。

「ほれ、注文の」

「ご苦労様、イグレシオ医師」

馬車の中から聞こえてきたのは、艶やかな声色。ハツとしたソレイエルは反射的に伸ばしていた手を引き寄せると、低い声で唸った。この淡々とした抑揚の、女性としては少し低めの声には、覚えがある。

女はソレイエルが警戒しているのにすぐに気付くと、くすくすと笑った。十数年前には聞いたこともなかったその笑い声に、時も人も移ろう時間の流れを感じたのだろうか。ソレイエルは殊更不快になったのか、僅かに表情を歪めた。

彼が覚えている限りでは、この女は必要以上に笑わない女だった。相手の心を読み、作った綺麗な笑顔を浮かべるような女だったのに。こうやって自然な笑い声を漏らすような女ではなかったのに。

そんな気配を敏感な彼女は察したらしい。彼女はわざとらしく、馬車の戸越しにでも分かるほど、拗ねた気配をソレイエルに向ける。「あら、そんなに嫌がらなくても良いじゃない。ねえイグレシオ医師様」

「その呼び方、止めろつつてんだろ。……っーか、アンタが出てくるってことは、やっぱりそーゆーことかよ」

「ええ、そういうことよ。ほら、クスリは？」

「……………高いんだぞ、材料。文句言つて安くさせようとか思うなよ」

「わかつているわ」

薬の入った箱と引き換えに内側から差し出された革袋を受け取ると、軽く振るように重さを確かめて、ソレイエルは息を吐いた。薬の世話をしていた頃に、何かと薬の原料や状態に文句をつけて、値段を材料費ぎりぎりまで下げられた苦い思い出がある所為だろうか。彼女から渡されると、もしかして少ないのではないかと自然と疑ってしまう癖が付いてしまったようだ。

革袋の口を開け、日の光で反射する金色の光を確認し、ソレイエルは肩から提げていた鞆に仕舞った。それを物音で察したのか、また小さくくすりと笑う声が聞こえ、彼はまた不満げな表情になった。「また、貰いに来るわね」

「へーへー、いつでもお待ちしてますよっと。状態変わったら、

すぐにちゃんと伝えよ」

「ええ分かっているわよ。ああ……………そう。そういえば一つ伝えることがあったわね」

馬車が微かに軋む音を立てる。何事かと顔を上げたソレイエルの視線の先に、赤い髪と紅を刷いた唇が飛び込んできた。

鳶色の瞳が、ソレイエルの姿を映す。

「……………あ？」

何か嫌な予感を感じ取ったソレイエルが、軽く眉根を寄せて戸口に近寄る。相手が近くまで来たのを確認した彼女は、囁くような小さな声で言った。

「近々、というか今日明日頃にでも、この街に極秘任務を賜った『チーム』が来るわよ」

それを聞いたソレイエルは、眉間に皺を作りながら馬車に背を持たせ、左手で腹を抱え右手の指先で唇を撫でる。その体勢は、ソレイエルが深く考え込む時の昔からの癖だ。

ソレイエルが持たれた拍子に馬車が軽く揺れたのを、女は「しょ

うがない人だ」と言いたげな様子で苦笑を浮かべ、膝を折って少しでも小さな声が聞こえ易いよう、配慮を見せた。

暫くしてソレイエルは小さく舌打ちをし、空を仰ぐ。雲も殆どない真つ青な青空は、どことなく嘲笑われているような気がしてきて、先ほどまでは気持ちのいい晴天だと思っていた天候も気に入らない。晴れと雨では、たったそれだけの天候差といえども移動速度がだいぶ違う。晴れが続いたとして王都からここまで通常5日、早馬なら2日ぐらいだろうか。雨期特有の雨が降ったとして、山が少ない反面横殴りの豪雨になり易い傾向がある。そうならば早馬としても4、5日は掛かるだろう。

残されているだろう時間を計算して、ソレイエルは足でとんとんと地面を叩く。何の目的で王都から『チーム』が来るのかは、考えるまでも無かった。

「面倒くさいな」

リュセアを連れて、余裕を持って早々に姿を晦ましてしまいたいところだ。だが何の準備もなく樹海に飛び込んでしまう形になるのは、出来るだけ避けたかった。

それを察したのだろう。彼女は小さな溜め息を吐いてソレイエルを見る。

「……そのうち、樹海にも手が伸びるかも知れないわね」

「獣達を敵に回す気か？」

ソレイエルの苛付いた様子の呟きに、「連中の考えることなんて分かるわけ無いでしょう？」という、見下したような冷やかな声が返ってくる。

彼女にはソレイエルが動物に対して　いや、樹海のあらゆる生き物に対して　必要以上に気にかけているように見えて、それが気に入らないだけなのだ。それに関してはソレイエル本人も分かっているからか、それとも言いつ返す言葉が見つからないのか、何時も何も言わないのが常だった。

結局のところ、彼女の優先順位と彼の優先順位の差と言ってしま

えば、それまでだ。

「……私達は、主の言葉に、意思に従って今までやってきていたわ。こんな形で終わらせられるなんて、許さない。許せないわ」

ぎりり、と歯を食いしばる音が聞こえ、ソレイエルはそつと彼女を盗み見た。

彼女の『主』とは誰か、ソレイエルはよく知っている。だから、彼女のその憤りもよく分かる。第一『あの場所』から出て行くにあたって、レミアの親が経営する宿場を紹介したのも、必要な設備を整えれるだけの資金を提供してくれたのも、彼女の言う『主』なのだ。

「このぐらいしかできない」と寂しげに、けれど自分の意思を尊重してくれて、黙って見送ってくれた。ソレイエルがそのことを忘れたことは、一度もない。あの時の表情は、忘れようとしても忘れる事は出来なかった。

受けた恩はしっかり返す。本人が亡ければその子息らに。それがソレイエルの持論だ。生憎、その『主』はまだ健在のはずなので、きつちり本人に返すつもりだが。

「で、どうするんだよ」

ソレイエルの言葉に、少し躊躇うような女の気配。何か不都合があるのかと見れば、彼女は迷うような表情で視線を彷徨わせていた。その珍しい様子に思わずまじまじと見てしまうところだったのを、ソレイエルは寸前で思い止まった。

「力を貸してもらいたいところだけれど」

女が、軽いため息を吐く。何かを諦めたような、そんな様子で。

「自分の思うようにやって頂戴、イグレスオ医師」

溜め息と共に吐き出された言葉に、ソレイエルは呆れた表情で息を吐いた。まさかその言葉が返ってくるとは、思いもしなかった。

「結局、それかよ」

「だって貴方は、現状、今は私達からは離れて、ただの薬剤師でしょう？ 本当は戻ってきて欲しいのだけれど……私達には、貴方の



動きを制限する権利は無いわ」

だから貴方がどこに行っても何をしても、私達は「知らない」。

そう言外に仄めかし、女は微かに笑った。その気配は外のソレイエルにも伝わったようで、呆れ返ったような苦笑が返ってくる。

自分にも『騎士』という立場がある。この件で、恐らく上層部の数人と敵対してしまうだろうと理解している今、はつきりと言葉にしてはいけないものも多々あるのだ。それを、把握してくれればいい、今のところは　そう思っていたが、どうやら心配は要らないらしいと彼女は口元を歪める。

話は終わりだと言わんばかりに戸に手をかけた彼女に、ソレイエルはふと何かを思い出したように口を開いた。

「そういえばアンタ、相変わらずドレスレザーメール着てんのか」

「……ええ、そうよ？ 『騎士』となったからといって、女らしさまで捨てたつもりは無いわ。それに任務上、着飾る機会が多いのよ」  
そこで一旦言葉を切った彼女は、頬に手を当てて呆れたような、諦めたような息を吐く。それに何があつたのかを薄々感じ取ったソレイエルは、黙って言葉の続きを待った。

彼女は軽く目を閉じて首を振ると、再度息を吐いた。

「……以前舞踏会の護衛任務で同席したアリア嬢が、不審人物を追う際に、ね。ほら彼女、昔からドレスを着ることが少なかったでしょう？　それで、動きにくいとスカートを切ってしまった。それを見たときに、やっぱり慣れは必要だと思って、もう少しゆつたりとした物を新調したのよ」

「ははは……そうか」

アリア、という名前に覚えがあつたのか、ソレイエルは乾いた笑いを返した。

帝国騎士団を率いる8人の現隊長の内、女性は2人しか居ない。小柄で動きが素早く、軽い身のこなしをするのが、アリア＝ライオネイルという『騎士』だった。ライオネイル大公の息女でありなが

ら、幼い頃から針や茶会よりも剣を振るう事に楽しみを見出していたという彼女なら、確かに普段あまり着ることもないドレスでは動きにくいと言いそうだと、ソレイエルも納得顔だ。

そんなことを考えていると、女が馬車の中で悪戯っぽく笑みを浮かべ、ソレイエルを見返した。

「それで 私の衣装が、どうかしたのかしら？」

「んあ？ いや、どうかしたとかじゃなくてな……なんつーか、もうアンタの服装って、騎士に全然見えないレベルだなと」

「あら何を言っているのかしら、イグレシオ医師。私達は元から、騎士と知られてはいけない立場よ」

「そーなんだよなあ。あのさ……変なこと聞くけど、息苦しくない？ チェルシー」

名前を呼ばれるとは思いつたのか、彼女は驚いた表情をしてソレイエルを見返した。そしてぷつと笑うと、さらに笑い出しそうになるのを堪えながら首を振った。

「私は、望んでこの立場になったの。知っているでしょうイグレシオ医師様。私達の部隊は、そういうものよ」

「ならいいけどな……」

チェルシーに言われ、彼はむつすりとした表情で顔を逸らす。

確かに、彼女が属するのは特殊な隊だ。その立場や任務上、むやみやたらに素顔を表に出すことは許されて居らず、彼等の顔を知っているのは騎士団長とそれ以上の地位を持つ、一部の者達だけだった。

普段、任務が無い間は役人に扮して城に上がり、影に隠れて皇族を護っている彼等は、騎士団と呼ばれながらも皇室直属の私兵団のようなものだ。他の部隊とは異なり、皇室の裏を駆け抜ける特殊部隊。それが、チェルシーの所属している『騎士団』の正体だった。

その任務は危険なものが多く、彼等の為によく薬を処方したものだ、ソレイエルは当時を思い出して溜め息を吐く。正直なところ、自分が居なくなってから十数年経つにもかかわらず、こうして彼女

が無事な姿を見せてくれたのは嬉しくもあった。それはつまり、皇室に大きな問題がそれほど起きていないという事だからだ。

むっすりとしたままのソレイエル顔を見ながら、彼女は微笑んだ。

「心配してくれて有り難う、イグレスオ医師様。私達はみんな、貴方に感謝しているわ。……だから、あまり危険な物事に首を突っ込まないで下さるかしら」

「……突っ込ませようとしてる奴が、よく言っぜ」

「お世辞じゃないの。本当にそう思っているのよ。……そういうのは、私達の仕事だわ。あの御方も貴方が危険に曝される事を望んではいらっしやらない」

その言葉にふっと脳裏にその姿が浮かび、ソレイエルはゆっくりとチエルシーを見た。

「アイツ、元気にしてんのか」

「……ごめんなさい。出して」

呼び止めようとしたソレイエルを遮るように、戸が閉められる。

鼻先を掠めたそれに驚いてソレイエルが数歩下がると、それを見計らったかのように馬車が動き始めた。そしてそのまま、馬車はゆっくりとその場を離れ市街地へと姿を消した。

チエルシーのその態度に、全身から血が引いたような感覚を覚える。軽く痺れる両手をばしん、と音を鳴らして組み、背中を丸めてその手に額を押し当てる。

長く深い溜め息が、自然と口から吐き出された。

嫌な予感。そんなレベルではなかった。最悪な事態を想像して、ソレイエルは震える手を押さえるので精一杯だった。

数度の深呼吸でなんとか手の震えを止めた彼は、組んでいた手を解いて空を見上げる。それから、口元に意味深な笑みを浮かべた。

（借りを返す日が来た、か）

自分の我が侘で彼等の前から去って、既に12年もの年月が経っていた。それでも途切れることなく彼等と繋がっているのは、なん

だかんだと言いながらソレイエルが彼らの事を気にかけているからだろう。

初めのうちは定期的に、頻繁ともいえる間隔で連絡を取り合っていた。自分が居なくなつた後の様子が知りたかつたこともあり、馬車で薬を受け取りに来ると、毎回のように話を聞きたがつたこともあつた。あの時に残してきた青年達が、心配で仕方が無かつた。けれど数年経つとお互いに、どこか自然と疎遠になつていき、終いには数ヶ月に一度依頼の連絡が来ればいい方というぐらになつてしまつて。

もう、自分の事など忘れられたのだろう。そうソレイエルは思つていた。表立つた国同士の争いが無いとはいへ、全く問題がない訳ではない。だから、どれだけ自分を覚えている人間が城に残っているのだらうと、考えた事もあつた。

けれどそれは間違つていたらしいと、ソレイエルはようやく理解した。繋がりを持ち続けることによる危険から、彼等はソレイエルを守つていたのだ。そうして敢えて太い繋がりを絶つことにより、ソレイエルは王都の誰の目も向けられずに過ごす事が出来た。彼等が盾になつてくれていたのだと初めて知つた彼は、もどかしい気持ちを覚えながらも感謝した。

そして、ソレイエルの知識や技量とを引き換えにしてまでそうしなければならなかつた事情といへば、1つしか思い浮かばない。

（あのおっさんの手のひらで踊るつもりはないが　　）

「守りたいものは、この手で」

（……乗つてやるよ、ヴィンスヴェルト）

自身の手のひらを、じつと見つめる。そしてその手を力いっぱい握り締め、ソレイエルは前を向いた。

誰かの思惑に嵌めることは、彼が最も厭うことだつた。自分の行動を他人に誘導されるのはいい気がしない。けれど今回ばかりは、敢えてそれに乗じて行くしかないということを、ソレイエルは察していた。

そうしなければ、気づいた時に何を失っているのか。想像するまでもなく分かりきっていた。

元から王都の人間達の殆どは、ソレイエル顔を知らない。名前だけが1人歩いていたあの頃、実際にソレイエルの姿を見ていたのは数少ない者達だけだった。それは今、彼が何処で何をしているようにとも、身元がバレることは無いという事だ。

兎にも角にも、情報を集めなければとソレイエルは思う。何が起きているのか、どうすれば良いのかを考えるには、途切れ途切れの情報では何も判断できない。

街へと真っ直ぐ向かっていったライアンが、一体どれだけ有益な情報を手に入れてくるのか。案外侮る事が出来ない、あの青年の情報網を頼るしかないのは多少不服だったが、文句を言ってられる様な状況ではない。そんな事をしている間にも、裏では何かが動いているのだ。

「ふー……さて、どうしようかな」

時間的には、ライアンが戻ってきていてもおかしくはない。傾きだした太陽を見上げ、ソレイエルはふっと息を吐いた。

街には物騒で厄介な人間がうようよと存在している。けれどあのライアンなら心配は無いだろう、そうソレイエルは信じていた。ああ見えても、ただの“愛玩人形”ではないのだ。

ふっと口元を笑みの形に歪めると、ソレイエルは『細石亭』へと足を向けた。

食堂『細石亭』の戸を開けた彼は、何時もの奥の席に座っているソレイエルの姿を見つけ、ほっと息を吐いた。特に待ち合わせをしていたわけではないが、マスターとD.O.の関係を考えればそれ

はとても自然な事だった。

急いだつもりは無いものの自然と足早にソレイエルの下まで来たライアンを、彼は冷たい飲み物が入っている硝子のコップの中身をストローでかき回しながら、上目遣いで確認した。

「遅かったな」

言ってから眠たげに欠伸を漏らしたソレイエルに、ライアンは一瞬心配の色を浮かべたが、すぐに何事も無かったかのように正面の椅子に座る。何時からそこで待っていたのか、ソレイエルの前には空になったコップが2つほど、手元に持っているものの他に置かれていた。

ライアンは相手の様子を見ながら、軽く肩を竦める。

「少し、遠回りをしたものですから」

「……ふーん。まあ無事ならいいよ。んで、そっちはどうだった？」  
ソレイエルに言われて、ライアンは何処からか四つ折りにされた紙をすつと差し出す。面倒くさそうに紙を開いて文字を眼で追ったソレイエルは、心なしかほっとしたように肩の力を抜いたように見えた。それから納得したような表情になると、次にはどこか落ち着かない様子で眉根を寄せた。

ソレイエルは一気にコップの中身を飲み干すと、息を吐いてその紙を元通りの四つ折りに戻した。そして椅子の背にかけていたカバンから、チエルシーが報酬の金貨を入れて渡してきた革袋を取り出すと、ひらひらとライアンに向けて手のひらを見せる。それにライアンは承知したように、自分の腰の後ろから取り出したソレを渡した。

例の言葉もそこに、手のひらの重みを確認したソレイエルは、とくに中身を移し変えていた空の革袋の底に、ライアンから受け取ったナイフの刃を当てる。慎重に底を縫い目に沿って半分ほど切ったところで、切り開いたそこから二つ折りにされている紙が零れ落ちた。

それを見ていたライアンは、革袋の二重底に気付いたソレイエル

よりも、その紙を渡した相手の方が気になるようだった。

一目見て分かる、上質なもの。それは、間違っても一般人が、手軽に買い求めることができるようなものではない。ただでさえ紙は貴重な資源だと言われている中で、表面が滑らかで光沢のある、綺麗に加工された紙を普段から使用しているのは貴族と、そして富豪くらいだ。

「あの女らしい小細工だよなあ」

他に何も入っていないか、二重底を調べながらそう呟いたソレイエルに、ライアンはさつと顔色を変えた。

ソレイエルが「あの女」と呼ぶ女性を、ライアンは1人しか知らない。そしてどこか楽しそうな表情をさせるのも、相手がどういう人間なのか察するには十分すぎるものだった。

「あの女……って、まさか今回の『依頼』は」

「そのまさか。いや、あのおっさんから連絡が来た時にもしかしてとは思ったけどな」

「また、巻き込まれるつもりですか!？」

「声がでかい。うるさいぞ」

ソレイエルはまだ何か言いたそうにしているライアンを制し、手に持った紙に書かれている、数行の文を目で追っていく。その紙を読むにつれて、初めは気だるげだった彼の眉間に、少しずつ皺が寄っていくのをライアンは見逃さなかった。

読み直すように、確かめるように数度ソレイエルの視線が紙の上を走った。

数秒後、「あーっ」と低く唸る声に、ライアンは不機嫌そうな表情になる。ソレイエルが何を考えているのか、何をしようと考えているのかが、何となく分かったからかもしれない。

不機嫌を隠そうともしないライアンを横目で見たソレイエルは苦笑したが、ライアン自身は気付いた様子はなかった。紙に書かれた内容を気にしつつ、彼は少し拗ねたような口調で訊ねる。

「なんて書いてあったんですか」

「んー、あんまりよろしくないこと」

ソレイエルの手のひらの上で、僅かな魔力が動き革袋と紙が音もなく燃える。それは、この情報を貰ったという証拠を消すためなのだろう。煙さえ上げずに、接触した証拠は跡形もなく燃やされ、僅かな燃えカスだけが机の上に舞い落ちる。

相変わらずの手際にライアンは息を吐いた。Dollであるライアンには、魔力の流れなどは見えない、見ることが出来ない。けれどソレイエルの魔術が綺麗なものであることは、何となく感じる事ができた。

一片の無駄もない魔術は、遠目から様子を伺っていた給仕の娘にも見えたのだろう。遠くの方で、控えめな感嘆の声が上がったのが聞こえた。

人、エルフ、ドワーフ、Doll。似た姿をしていながら、人はエルフ、ドワーフら妖精種と違い、Dollは人と違う。その差は寿命や身体のパーツだと思われがちだが、決定的な違いはDollは魔術を扱えず、人間や妖精種は魔術を扱えるという差だ。

外部からの魔力を遮断してしまう性質の輝石を使用されているDollを始めとして、魔力を感じる機関が無いDoll達は、その為には魔術に対してとても疎くなってしまう。例外として特殊な加工によって魔力の流れを読み取る方法も存在しているが、大変難しいものであるため、大抵どのDollも魔術を扱うことも魔力を感じることが出来ないのだ。

ライアンの様に、僅かでも感じ取る事が出来るDollは極めて稀で、貴重な個体とも言えるだろう。けれど本人に自覚が無い以上それらは無いに等しいものだった。

ソレイエルは暫く考え込むようにテーブルに肘を付き、その手に顎を乗せてどこか遠くを見ていた。そしてふと思いついたように顔を上げると、自分の言葉を待っているライアンと目を合わせる。

「ライアン。オマエ、ちょっと“家”見て来い」



## 紅色人形 04

朝と昼の間の、丁度客足の途絶える時間帯に『細石亭』を出たりユセアは、出来るだけ人目につかないように宿場へと戻った。

給仕の娘が言った「少ししたら宿場へ戻っても平気よ」という言葉の意味はこういう事だったのかと、彼女は客の姿のない店内を思い出す。店の外にも人気はなく、この時間帯を知っていたから、ソレイエル達は自分を一人にしても大丈夫だと判断したのだろうとリユセアは思う。

一人にされた寂しさは消えなかったが、四六時中誰かと一緒に居る息苦しさを考えると、こうして自由に動ける時間があるという事実はどこかほっとして、肩から力を抜けた気がした。逃亡者となつてしまった自分に、もしかしたら氣を使つてくれているのだろうか、リユセアはなんとなくソレイエル達の氣遣いを感じた気がした。日が暮れだしたのか、窓から見上げる空が僅かに朱を帯び始める。何もない殺風景なソレイエルの部屋の中で、リユセアはベッドに座りながら、窓枠に両腕をついて寄りかかっていた。

何もやる氣が起きない。毎日のように掃除をしなければならぬほど部屋が汚れるわけでもなく、暇を潰せるような本や物があるわけでもない。ただただ、目の前に広がる樹海を眺めながら、これからどうすればいいのか、どうしたらいいのかを考え続けるしかなかった。

マスターの無事が、リユセアの一番の氣がかりだった。あまり人を寄せ付けず、その為に自分で出来る事をやろうとしながらも、周囲の人達から守られ支えられてきた人だ。優しく、自身のことよりも他人をいつも氣にかけていた人。そんなマスターを、命令だったとはいえ樹海に独り残してきてしまったことは、リユセアの“ココロ”に大きな傷を遺していた。

今すぐにも樹海へ行つて、マスターの元へ駆けつけたい。だが

何処で別れたのか分からない以上、それが叶う事は無いだろう。

溜め息がその口から漏れる。昼の日差しで暖められた室内に窓から吹き込む風が、樹海の涼しい空気を運んできて少し心地よかった。

「……ヴェルナス様」

別れ際の強い意志を秘めた眼を思い出して、リュセアは沈んだ気持ちで窓枠に乗せた腕に頬を寄せた。

マスターが望んだのは、リュセアが逃げ延びる事だった。望んでくれれば、自分はきつとマスターを守る盾になれたのに、あの人は自分の事なんて考えてもいなかった。元より戦闘面に特化しているわけではない『Twinkles』が、あの状況でマスターを助けられるはずもないが、それでもきつと、盾にはなれたはずだとリュセアは思う。

もしも自分が『KillingDoll』だったらと、考えることもあった。考えながら、「もしも」なんて有り得ないとリュセアは分かっていた。あの人が欲しかったのは「殺戮のための人形」では無かったのだから。

でも、もし。もしもあの時、マスターを庇う事が出来ていたら。ここに辿り着いたのはマスターの方だったと思うと、後悔の念がどつと押し寄せてきて、彼女は堪らずに呻いた。

もしかしたら二人で逃げ切れていたのかもしれない。Dollは痛みも疲れも感じないのだから。そんなことを考えて、けれどマスターはきつと悲しむだろうと思うと、どちらが良かったのかと考えるのも辛かった。

「最後まで……一緒に、いたかったのに」

けれどそれは、今は叶わない願いとなってしまった。

マスターの“命令”は、Dollにとって逆らいがたいものなのだ。その“命令”を跳ね除けられるほど、リュセアは自分が強いのかと分かっていた。

目を覚まして初めてマスターと出会った時のことを思い出し、彼女は息を吐いた。

あの時、初めて聞いた優しい声で、優しい“命令”を下したマスターは、最後にそれとは正反対の“命令”を下した。その声が、耳に残って離れなかった。

「そう、です……。約束、しました」

今まで約束を一度も破ったことがない、彼女の最愛のマスターの「絶対」という言葉。何事もなければ、「絶対」という言葉を違えることなく守り抜くだろう、約束だ。

ぎゅっと腕に触れていた手に力を入れて、リュセアは窓の外を眺める。

「迎えに、来てくれますよね。ヴェルナス様」

もしかしたら、助かっているかもしれない。いや、きっと助かっているはずだ。昔、彼が言っていたように、また樹海の住人が助けにくれているに違いない。

そんな都合がいい事が、起こるはずはないと分かっていた。けれど、もしかしたらという希望を捨てることはできなかった。

そうやって想えば想うほど、ヴェルナスに逢いたいという思いは膨らんでいく。何も知らずに、何も分からずにいた過去の幸せだった頃の思い出に、弱い“ココロ”が引っ張られてしまいそうで、リュセアはそれを振り払うように頭を振った。

あの頃は自分のマスターがどんな人なのか、考えもしていなかった。確かに何も知らないまま暮らしていた頃は楽しかったし、幸せだった。その影でマスターが何を思い、何を考えていたのか。そんなことなど微塵も気にしたことは無く、ただただ優しい「主人」とその家族に囲まれて、他の事に目を向けようともしなかった。

その頃に帰りたくなっている自身の弱い“ココロ”を、認めるのが怖かった。そんな自分を認めれば認めるほど、自分自身を嫌いになってしまいそうで、リュセアは何度目かの溜め息を吐いた。

夢現の間に聞いた、ライアンの言葉が耳の奥で繰り返される。「<sup>いま</sup>現在を見る」と囁いた声は、今までに聞いた事が無いほどの、“痛み”や“悲しみ”が織り込まれていた。あの声を聞いてしまった今、

自分だけが辛い思いをしているなどという考えを、どうしてすることが出来るだろう。どうして、幸せな思い出に逃げる事が出来るだろう。

そんなことが、出来るはずは無いとリュセアは息を吐く。あんなに泣きそうな声で、それでも前を向いて行こうとするライアンの前で、弱さに甘えていいはずが無いと、彼女は思った。

ぼんやりと眺めていた外の風景が、青く暗く色を変えたことによりやく気が付いたリュセアは、火を灯さないままの暗闇の中で、両手を上へと伸ばした。それから片側のカーテンを閉めると、薄ら闇の中でランプを探し当て、手馴れた動作で火を灯した。

炎の明かりが部屋をぼんやりと照らし出す。ソレイエルが何時も点けている魔道具の明かりと比べて、格段に心もとない明かりではあったが、リュセアにとってはそれで十分だ。

壁の掛け具にランプを吊るそうとしたリュセアの耳に、慌ただしい足音が聞こえたのはその時だった。何事だろうと彼女がランプを吊るして振り向くと、目の前で部屋の戸が荒々しく開け放たれた。驚いた表情でその勢いに押されるように、リュセアが数歩下がる。

戸を開いたのはレミアだ。急いで来たのだろう、荒い息をしながら、少女は部屋の中を確認してリュセアを見つけた。そしてほっとしたような表情を浮かべると、部屋に入り静かに戸を閉める。

戸に寄りかかるように、ずるずると座り込んだレミアに、リュセアは困惑した面持ちで近付いた。

「レミア様……？」

「はー……っはー……リュ、セアちゃん、あのね……」

「は、はい」

息を整えながら、途切れ途切れに話そうとするレミアの様子に、何があったのだろうかというリュセアは思わず不安になる。悪い知らせだったらどうしよう、もしかしたらソレイエルに何かあったのだろうか。そんなことが頭に浮かんで、原動石が熱を帯びて熱くなる。レミアは一際大きな息を吐くと、部屋の戸に頭をつけてリュセア

を見上げた。

「……今、窓から、顔出しちゃ……ダメッ……」

えっ、と小さくリュセアが声を上げ、不思議そうに首を傾げる。だがレミアは真剣な表情で再び立ち上がると、窓へと近付いてカーテンを勢いよく閉めた。

きちんとカーテンが閉まったことを確認すると、レミアは左右のカーテンを握ったまま再び息を吐いた。

ソレイエルは悩んでいた。

これから先、何をすれば良いのか、どうすれば良いのか、そんなもの分かっていたつもりだった。自分が何を守りたくて、どうしたいのか。分かっていたはずなのに、いざその時になって、こんな風に迷いが出るなんて思っても居なかった。

（……薬草、どうしよう）

大きな溜め息を付いて、ソレイエルは食堂の机に突っ伏した。

先ほどまで一緒に居たはずのライアンは、ソレイエルに言われたことを確認するため、早々に席を立ち既に姿はない。その代わりに夕食時が近いのか、食堂の席にちらほらとまばらに人が座っているのを見て取れる。

ライアンが全速力で移動すれば、“家”とこのことの往復に半日も掛からないだろう。鉱山を通る道は複雑で、下手をすれば迷うこともあるが、樹海を突っ切ることが出来ればその心配はない。樹海で注意すべき点は2つ。樹海の狼との遭遇を避けることと、突然と現れる大きな窪地や崖に気を付けることだけだ。けれどそれも、位置を覚えてさえいれば、落ちることもない。

問題はどうかやって、何時移動するかだとソレイエルは考える。時

間が経てば経つほど、動き難くなることは明らかだ。そして身を隠したいのなら、坑道の先の自然窟を通って行くのが一番確実といえるだろう。自然窟の先が何処に繋がっているのか、知っている者は少なく、また迷路のようになっていて追うことは困難だと、ソレイエルはよく知っていた。だからこそすぐに姿を眩ませられるように、この村に留まっているのだから。

ただ自然窟を通る際に、気をつけないといけないことがある。そのうちのひとつが、この鉱山でしか採取することが出来ない、特殊な輝石がクラスターの状態で群生しているという、“幻の自然窟”だ。人を魅了し、人の生気を吸うと言われているその輝石の採掘場から帰ってきた人間を、ソレイエルは二人しか知らない。

（地図を持っていけば、多分大丈夫だとは思っただけだな）

坑道の地図を持っている人間は少ない。ソレイエルは薬剤師という肩書きと、応急治療が出来るという事から、特別に坑道の地図を預けられている者の一人だ。けれど自然窟までの地図を持つ者は、ソレイエルとこの鉱山の主、そして古くから鉱山を仕切る家系の長だけだ。だから自然窟へ入ってしまったえば追いつかれることもなく、身を隠すことが出来る。

（んでもない。心配っちゃ心配だから……念のため、複雑なミチを通る方がいいんだろうな）

そう思いながら息を吐いた直後。耳の後ろの方で小さく、硝子にヒビが入る時のような音がした気がして、はっとソレイエルは顔を上げた。気のせいだろうかと思いつつ食堂内を見渡すと、他にも数人、自分と同じように周囲を見ている姿があるのを見て、微かに聞こえるこの音が空耳などではないと彼は思わざるを得なかった。

（なんの音だ……？ まさか）

ぴし、ぴしりと鳴る、何処かで聞いた覚えがあるその音に、彼は何かを思い出したのだろう。大きく目を見開き、テーブルに付いていた手が心なしか震えているようだった。そしてその手をぐっと握ると、舌打ちをして歯を食いしばり、普段は見せることのない怒り

の形相をその顔に浮かべた。

ヒビ割れの音が大きくなるにつれて、食堂内も騒がしくなっていく。だがこの音が正確に何の音なのか、理解できている者は居ないようだ。

唯一何が起きているのかに気が付いたソレイエルだけは、小さな声で短く口汚い罵倒を吐き捨てて舌打ちをした。

「ッ、んだって、こんな時にッ！」

彼は苛立ったように席を立ち、食堂の戸へと足早に向かう。次第に大きくなっていく音が思い出したくもない琴線に触れて、必要以上不安を掻き立てていくようで、より最悪な気分になっていく。

それでも、とソレイエルは唇を噛みながら思う。もし自分が思っている通りの事態になっていたら、という不安と焦りから、全てを投げ出して頭を抱えて蹲りたい衝動に駆られそうになる。けれどそれをどうにか抑え込み、しなくてはいけないこと、それを実行する為に、彼は行くべき場所へと急ぐ。

そしてその手が戸に届くか否かという距離で、それは起こった。

「……っ！！ うあああああっ！」

「きゃあああ！」

「うぐっ……な、なんだ!？」

窓ガラスを破るような一際大きな音と、まるで突風のような衝撃に、ソレイエルは吹き飛ばされたように床に転がった。他にも椅子に座っていた者や音に思わず席を立とうとした者が数人、ソレイエルと同じように衝撃を受けて床に倒れる。それ以外の客達もなんらかの衝撃を受けたのか、頭を押さええていたり、抱え込んだりしている姿がそこかしこで見受けられた。

周囲の空気が変わるのをソレイエルは肌で感じ取り、血の気が引いた顔色で起き上がった。衝撃による頭痛が酷かったが、それよりも恐れていた事態が起こってしまった方が、何よりも怖いと思う。

震える手で戸を開く。明らかに普段とは違う風が感じられた。それは彼が恐れていた事態が起こったという事であり、もう時間が無

いということを示していた。

切羽詰ったような様子で彼は振り返ると、カウンターの頭を押さえている食堂の主を視線で捉え、叫ぶ。

「おっさん！ 結界が破れた、連絡頼む！」

「お、おお！？ こりやその衝撃か！ 代替の用意はあんのか？」

「んなもんあるわけねえだろ……原因が分かるまで、見回りしてもらうしかねえよ」

「ああ、わかった。移動するなら今のうちにしとけよ、ソレイエル。結界が無いんじゃないやあ、Dóolもそうだがおめえも匿つてられねえ」

「心配してくれてサンキュ。オレは大丈夫だよ……まあDóolとかは移動してもらわねえとアレだけどさ」

苦笑に似た笑みでそう答えると、ソレイエルはそのまま食堂を後にし、真っ直ぐ宿場へと向かう。普段はあまり人影のない村だが、あちらこちらで異変を感じた住人達が建物の外へと姿を現しているのを見ると、こんなにも住んでいる者達が居たのかと、ソレイエルは内心驚きを隠せなかった。

「イグレシオさん！ これ何ごとですか！？」

「村を護つてた結界が破れた音だよ。とりあえず村の連中に、マスター契約のないDóolを家から出すなって伝言してくれるか？」

「はい」

「イグレシオ先生、わたしは」

「エルフやハーフの連中に、外出控えろって取り合えず言っておけ。あとは村長たちの指示があるまで大人しくしとけよ」

薬を処方する時以外に接点が無かった、名前も知らない住人から名を呼ばれ、ソレイエルは驚いていた。出来るだけ関わりを持たないよう、接する時は淡々とぶっきらぼうにすることを意識していたはずなのに、まさか声をかけられるとは思わなかったのだ。意識していなかったことと、緊急事態だということと、ついつい反射的に反応してからその事に気付き、彼は誰も見ていないところで自己嫌



悪のために息を吐く。

宿場の戸を開くと、受付のカウンター前に小さな人ばかりが出来ているのを見つけ、彼は足を止めた。様子を伺うと、どうやらレミアの父親に指示を仰ぎに来た住人ようだ。困惑をしているものの、大きな問題は起きていないのか、住人達が冷静にまだ動いている様子に、ソレイエルは安心したように肩を撫で下ろした。

ほっとしたのもつかの間、ソレイエルは気配を押し殺しながらロビーを通り抜けると、自分の部屋へと急ぐように向かう。リュセアと昼前に別れたまま、ちゃんと部屋に戻っているか確認をしていないことを思い出したのだ。

Dollにとつて、マスターの命令は絶対的と言つても過言ではないが、マスター以外の命令に対しては拒否をすることが出来る。そのことをつい失念していたと、彼は小さく舌打ちをする。

足早に階段を駆け上がり、廊下を通り抜ける。そして自分の部屋の前へと辿り着くと、彼は短く息を吐いて戸を開いた。

「ちょ ああ……ソルだったの」

「……レミア？」

警戒していたのか、リュセアを庇うように身構えていたレミアの姿を見て、ソレイエルは気が抜けたような声でその名を呼ぶ。その声に、レミアもほっとした様子で警戒を解くと、ぼふんと音を立ててベッドへと腰を下ろした。

何が起きているのか理解できていないリュセアの様子に、それでも無事だった事に安堵しつつ、ソレイエルは後ろ手に部屋の戸を閉める。

「無事でよかったよ、リュセア。……ったく。にしても、一体何がどうなってやがるんだ」

「さあ、アタシだって知らないわよ」

ランプの薄明かりを頼りにしながら、部屋の明かりを点けていくソレイエルの姿を見ながら、レミアは軽く肩を竦める。そして思い出したように後ろを振り返ると、先ほど閉めた厚手のカーテンに隙

間が無いことを確認して、安堵したように息を吐いた。

部屋に設置されている二箇所の照明を点けてランプの火を吹き消すと、ソレイエルは部屋の隅に折り畳んで立て掛けてあるテーブルを引っ張り出し、部屋の中央に組み立てた。そして同じように立て掛けられていた折り畳み椅子を組み立てると、ベッドに座ったままの二人に対して座るようにと動作で促す。そして自分は作業台の椅子に座ると、レミア達の方を向きながら足を組み、作業台に頬杖を付いた。

時間的に、ライアンはまだ戻ってこないだろう。それ以前に、ライアンの居る場所まであの音が聞こえるのかどうかも、甚だ疑問だ。だとしたら、この村は安全と思っっている彼がこれを知らずに戻ってきた時に、何も起きないと言い切れないのではないか。そう思った考えが頭の中を駆け巡り、ソレイエルは思わず眉根を寄せる。

「ない」とはつきりと言えない以上、警戒はするにこしたことはない。離れた場所に居るとしても、ライアンとの連絡方法が無い訳ではなかった。けれどそれを使うところを、親しい仲とはいえレミアに見せるわけにはいかない事情も存在していた。だからといって彼女を部屋から追い出すわけにも行かず、ソレイエルはその板挟み状態に苛付いたように頭を掻いた。

「……あー……とりあえず、あれだ。村の対応はどうするんだ？」  
気を紛らわそうとして尋ねたソレイエルに、落ち着かない様子で座っていたレミアは、はっと弾かれたように顔を上げた。そして小さく「んー」と声を出しながら、悩むように口で軽く折り曲げた人差し指を咥える。

暫くして自信がなさそうな表情で、たぶんだけれど、と前置きをして彼女は口を開いた。

「昔の『決まり事』を参考にして、村の警備をするって言ってたから……タブン、村の代表の父さんが指揮を取るカタチで、村と街の境界を巡回するつもりだと思うわ。鉾山の方は、兄さんが指揮を取るんだと思う。昼間よりも夜間の方が、見回りを強化しないとダメ

だと思っし……」

「まあ、そうだよな」

そう答えながら、ソレイエルは不機嫌を隠す様子もなく、諦めるように溜め息を吐いた。鉱山で採掘をするために樹海を浅くU字型に開拓した場所にあるこの村は、周囲は樹海の木々で多い茂られているため、隠れられる場所はいくらでもある。村をただ見回るだけでは、確実にそういった場所での見落としが出るだろう。毎日のように樹海を探索しているソレイエルなら、どこに隠れられそうなのか、警戒すべき場所などが分かっているが、そこまで手を貸す余裕は無かった。

黙り込んでしまったソレイエル達の様子を見て、何かが起きている事を察したリュセアは、困惑した表情で二人を交互に見た。

「あの……一体、村では何が起きているのでしょうか」

「ん？ あー、そっか。リュセアはDóolだから、この動きは分からないのか……」

声をかけられてようやく、リュセアには感じる事が出来ないのだと思い出したらしいソレイエルは、どう説明すればいいのか、うまい言葉を考え付く事が出来ずに、腕を組んで唸る。

Dóolは、魔術の概念を理解することができない。魔力を感じることが出来ないのだから、それは当然ともいえるだろう。いくら例外が居るとはいえ、そんな規定外のDóolがこの村にそう何体も居る方が異常だ。だからといって、このままリュセアに説明をしない、というわけにもいかない。彼女にとってこの問題は、決して他人事というわけではないのだから。

どう言えば理解してもらえるのか、険しい表情で悩んでいるソレイエルを見かねたのか、レミアが仕方が無い、という表情でリュセアと向き合った。

「あのね、リュセアちゃん。この村は、結界っていうとっても大きくて、目に見えない卵の殻に包まれてたの」

「卵のクラ、ですか……？」

「おいレミア」

いきなり何を言い出すんだ、と言いたげなソレイエルをその目で制し、レミアは少し驚いたような表情で見返してくるリュセアにうんうんと頷く。そして机の上で腕を組むと、背中を丸めて姿勢を低くしながらリュセアを見上げた。

「この村を悪いヤツらから守ってくれる、とっても凄い殻なのよ。でもね、さっきそれが割れちゃったから、みーんな大騒ぎしてるのよ。割れちゃった、どうしようって」

「そうだったんですか……私には、分かりませんでした」

「うん、アタシもそういうのはよくわかんないのよね。感じ取ったりするのとは出来るんだけど、アタシたちドワーフは、魔術って使えないのよ。だからそっちの話になるとちんぷんかんぷんでね……。そこは、リュセアちゃんと一緒ね」

そう言って苦笑に近い笑みを浮かべるレミアに、リュセアもつられるように笑みを浮かべた。

レミアに会話の輪から追い出され、不機嫌そうな表情で黙って二人の会話を聞いていたソレイエルは、わざとらしい溜め息を吐いた。そしてほんわかとした空気を醸し出すレミアを見ながら、机に肘を立てて頬杖を付く。

レミアの説明は、大雑把ではあるが大きく間違っているわけではない。結界は確かに目に見えない膜のようなものであるし、実際に似ている表現でソレイエルも教わってきた。そして術式によっては、特定のモノを寄せ付けけないという事も可能だろう。事実、それに近い効力を持つ結界が張られている場所を、ソレイエルは知っていた。

（医師ギルドと国立病院にや、実際に結界内の人間に危害を加えようと思ってる奴は入れない、別格の結界が張られてるしな……っーか、待てよ）

そこまで考えて、ソレイエルは頬杖を付いていた手から顔を離した。

よくよく考えてみれば、この村というよりもこの鉱山に対して、そういった結界が張られていても全くおかしい話ではない。反対に、結界で保護されていない方がおかしいのだ。

だとすればこの結界を張り、維持している者は、ただ1人しか居ない。それが壊れたという事は。

最悪な事態を思い浮かべたソレイエルは、深い溜め息を吐きながら前髪を掻き上げた。

「……この国の建国秘話、知ってるか」

突然のソレイエルの問いかけに、きょとんとしながらもレミアは勿論だと頷き、リュセアも話には聞いたことがあるのか、こくんと小さく頷いた。それを見ていたソレイエルは、小さく息を吐き、椅子の背にもたれる。

「空の主は領土を守り、地の主は富をもたらず。忘れてたよ。」

この鉱山は、地の主からこの国に与えられた、富の象徴だ」

「知ってるわ。『蒼空の主』様と『樹海の主』様に気に入られた初代皇帝の話でしょ？ でも、あんなの、おとぎ話じゃない」

全く信じていない様子のレミアの言葉に、ソレイエルは息を吐いて首を横に振った。

「ちげえよ。お伽噺じゃない。俺は『蒼空の主』に会ったことがあるし、樹海に生きるエルフは『樹海の主』の恩恵を受けて暮らしてる。……聖獣サマは大いに気まぐれだが、誓いは守る」

真剣な表情でそう言うソレイエルに気圧されたように、レミアはぐつと言葉を詰まらせた。

確かに自分はこの村から出たことはないし、あまり村の外の事に興味を向けたことも無かった。本の中の話は大抵作り物で、初代皇帝の話もどうせ事実を大げさにした作り話だろうと思っていたのだから、国内外を旅してきたというソレイエルの話を「ありえない」と否定する事が、レミアには出来なかった。

それに噂ではあったが、『蒼空の主』が空を飛翔していたという話を、全く聞いたことが無いというわけでもなかった。だから「実

際に会ったことがある」と言われては、言い返す言葉も無い。

言い返したくとも何も言い返すことが出来ないからか、レミアは拗ねたように頬を膨らませると、ぺたんとテーブルの上に上半身をうつ伏せる。

「むう……分かったわ。聖獣は実際にいるとして、よ。それと今回のことと、何の関係があるのよ」

「オマエな……ったく、少しは考えてみろよ。『樹海の主』のお膝元みたいなもんだぞ、ここの鉱山は。つーことはだ、ここに張られてた結界は、『樹海の主』が張ったものの可能性が高くないか？」

「え、なによそれ。『樹海の主』様に何かあったってこと！？」

「何も無い。……とは言えないだろ」

ソレイエルはそこで一旦言葉を切ると、結界が割れた時の様子を思い出しながら、話を続けた。

彼が知る限り、あんな風に結界が割れ壊れるという話は聞いたことが無い。大抵は「割れる」のではなく、薄くなり弱まっていくうちに、維持できなくなり消えてしまうのだ。例外があるとすれば、意図的に結界の外部から結界破りを仕掛けられた時ぐらいだろう。

外部からの圧力に、まるで硝子細工のように結界が壊れるのを見たのは、過去に一度だけあった。

「少なくともこの結界は、国立病院や医師ギルドだの、要所で張られてるような代物とはちよつと違うしな。大抵結界つてのは、術式を織り込んだ『オーブ』を使って張ることが多いんだ。けどこちら辺にはそんなモンなかったし、あんな結界の壊れ方は見たことねえ……多分、外部からの圧力で壊されたんじゃないか？」

「そんな まさか！」

レミアが顔を上げて声を張り上げる。ソレイエルも半ば冗談のつもりでそう言いながら、本当にそうなのではないかと不安になり、思わず肩を震わせた。

もし本当にそうだとしたら、この国は何処かからか攻撃を受けていることになる。この国は聖獣が守っていると言っが、その守りの

要である聖獣を直接攻められてはきつと、戦争慣れしていない軍では守りきれるかどうかだろう。

(……いや、アイツがやられるとは思わねえけど……)

白と淡い紫の後姿を思い出し、ソレイエルは小さく息を吐く。

特にこれといって他国の信教には興味はないが、ソレイエルは旅をしていた時に、聖獣宗教を国教とする国を多く見てきた。その中には聖獣によって直に守護されているこの皇国を羨む声もあったが、歴史的にも多くその姿を見せてきている『蒼空の主』が、面倒くさいとよくぼやいていたが、皇帝と共に姿を見せれば、そういった声は自然と小さくなったものだった。

たとえ聖獣宗教が国教ではないとしても、聖獣を信仰する者はこの大陸に多い。そんな中で聖獣に手を出そうとする国があるのかというのも疑問に思えた。人間もエルフもドワーフも殆どの者達が、『蒼空の主』の優雅に飛翔する姿に心奪われ、その神聖な姿を崇めるのだ。そんな存在に手を出そうとすればただで済むはずが無い。悩み始めたことに気が付いて、そんなことをぐだぐだ考えていても仕方が無い、と思い直したソレイエルは、落ち着くために深呼吸をした。そしてレミアを見ると、肩を竦める。

「まあどちらにせよ、オレたちがここで何を言ってもどうしようもないからな。出来ることをしていくしかねえだろ」

「……そうね。とりあえずアタシたちはアタシたちが出来ることを考えなくちゃ。この村にはDóolやハーフの人とか、沢山いるものね……」

頬杖を付いてレミアが溜め息を吐く。それにソレイエルも同意するように頷いて、息を吐いた。

樹海には樹海の掟がある。その掟を破った者は、例えどんな立場の者だとしても、樹海を守る獣達が相応しい罰を与える。時には命までも奪うその掟は、けれど“生き物”にのみ適応されるものだ。活動はしているが「生きていない」リュセア達Dóolは、その掟では罰を受けたとしても守られることはない。それでも彼等がこの

村に集まってくるのは、ここが結界によって守られている土地だったからだ。

この鉾山を保護するように張られていた結界は、鉾物だけではなく、この村を護るものだった。だからこそこの村は、D o l l や珍しい混血種達が安心して暮らせる場所となったのだ。特に人形師ドールマスターが多く暮らす街『アヴェリア』には、マスターを失いフリーとなったD o l l が『親』を求めて来る。そういったD o l l 達が闇で取引されることがないよう、『人形師ギルド』からの正式な依頼で保護していることもあり、村にはマスターのいないD o l l が数多く暮らしていた。

そう、この街に居るのは『Twinkles』だけではないのだ。それを思い出して、ソレイエルは沈痛な面持ちで腕を組み、椅子の背に寄りかかりながらずるずると腰の位置を前へとずらした。自我を持つD o l l 達は、そのどれもがマスターを失うと、『親』の元に帰ろうと各地を放浪する。その間に新しいマスターを選ぶD o l l も居るが、殆どのD o l l がアヴェリア街の噂を聞きつけ、ここへと集まって来てしまう。そういったD o l l を狙う輩から彼等を護るにも、今回の結界の消失は大きな痛手となっただろう。

だがそれらを考える前に、まずはリュセアをどうにかしなければ、と悩んでいるソレイエルの後ろで、戸が叩かれる。眉を潜めながら彼は振り向くと、幾分か硬い声色で返事をした。

「ういー……誰だ？」

「僕です」

「ライアンか」

疲れが滲んでいるものの、聞き覚えのある紛れもないその声に、ソレイエルは安心したようにその名を呼ぶ。そして椅子に座りなすと、現在の時間を確認して、小さく「早かったな」と呟いた。

ソレイエルに名を呼ばれたライアンは、静かに戸を開いて中に入ると、軽く寄りかかるようにしてその戸を閉める。そしてふう、と短い息を吐き、髪をかき上げた。その袖が所々破けているのを見て、



ソレイエルが眉根を寄せる。

「ひさしぶりに……よく、走りました……」

「ちよつとライアン！　どうしたの、服がボロボロじゃない！」

レミアも気が付いたのか、がたと音を立てて椅子から立ち上がった。その目の前で音もなく立ち上がったソレイエルが、少し怒っているような、むつとした表情で無言のままライアンに近付くと、レミアに見えない位置でその腕を掴み、服を捲り上げる。

皮膚の樹脂は、樹海の湿気でしっとりとしていて、まるで風呂上りの人の素肌のようなだった。ソレイエルはその腕を触りながら、真剣な表情で細かく樹脂の痛み具合を確認していく。突然腕を掴まれたライアンは何かを言いかけたが、その表情を見て口を噤んだ。

やがて両方の腕の痛み具合を確認し終わると、ソレイエルはほつとしたように肩の力を抜いて、ライアンから離れた。そして少し呆れているような表情で腰に手を当てたソレイエルは、疲れた様子のライアンの乱れて顔にかかる髪を指で退け、その頭を撫でる。そして仕方がない奴、と言いたげな表情で苦笑を浮かべた。

「急いでくれたんだよな、さんきゅ。……でももうちよつと気を付けろ、ライアン。お前を直せる奴は、いないんだ」

「申し訳ありません、マスター……」

頬の浅い切り傷を撫でるソレイエルの手を感じながら、ライアンは意気消沈した様子で軽く俯く。暫くしてその手が離れると、彼ははつと勢い良く顔を上げた。少し拗ねたような顔のレミアと、心配している様子のリュセアが真つ先にその視界に入ってくるが、そこにソレイエルの姿はない。

驚いたように目を瞬かせ、その姿を探そうとしたライアンに、ソレイエルは横の死角からその肩を叩き、新しく出した椅子に座るように促した。

「動きすぎて熱がこもってんのは分かるけどな。立ちっぱなしなのもアレだ、とりあえず座れ」

「はい」

「……それでライアンは、一体どこに行ってきたのよ」

レミアの言葉に、ライアンはどう返答すれば良いのかと、ソレイエルを見る。椅子に座らず、作業台に軽く腰掛けた状態のソレイエルは、うーんと軽く唸って腕を組んだ。

話すつもりが無い、というわけではない。だがその前に、ソレイエルには確認をしたいことが幾つかあった。どちらが優先かと言われても、どちらも同じ程度には重要なことだろう。いや、リュセアにとってはマスターに関することが、間違いなく優先となる。そう考えれば、話さなければならぬものの優先順位は自然と決まってくるだろう。

ソレイエルはまず何から、と考えて、息を吐く。

「……まず、今日手に入った情報からいくが。王都で騒ぎになってる事件について、重要参考人……というか、容疑のかかっているD.O.11が逃亡しているらしい。樹海に逃げ込んだとかで、樹海沿いの町には調査のための軍が派遣されるとか」

「それはこちら側にも入ってきました。被害者は下流貴族という話ですが、確かなところからの情報では、どうやら皇族に関わりのある貴族のようですね。皇族直下の部隊が動いているとの話もあります」

「王都の事件って、風聞紙に書かれてたあの？」

レミアの言葉を聞いて、ソレイエルはもう風聞紙に書かれているのかと、驚きながらも頷いた。王都からこれだけ離れている街でも騒がれるのだ、恐らく王都の方ではもっと大きな騒ぎになっているのだろうと、ソレイエルは軽くこめかみを押さえる。

レミアの隣で大人しく話を聞くだけだったリュセアが、「王都」という言葉を聞いて、落ち着かない様子になったのを見逃さなかったライアンが、ソレイエルを短く呼ぶ。

なに、と見返したソレイエルは、リュセアの視線に気が付いて口を閉じた。

「あの……王都の事件、とは……」

「これは僕の想像ですが、貴女のマスターの事ではないかと思  
います」

ライアンの言葉に、リュセアはえっと目を見開く。そして困惑し  
たように、眉根を寄せながら黙り込んでしまった。それを見たソレ  
ィエルが溜め息を吐いたが、リュセアの反応が理解できないライア  
ンは、どうすればいいのかわからない様子でただただ戸惑うだけだ。  
「あの……リュセアさん？」

ライアンの呼びかけも聞こえていないのか、リュセアからの反応  
はない。困り果てた表情でソレイエルを見ると、彼も困った様子で  
息を吐いた。

テーブルに頬杖を付いていたレミアは、そんな三人の様子を見な  
がらため息を吐く。

「つまり、なあに？ 被害者はリュセアちゃんのご主人様で、リュ  
セアちゃんは加害者だってことになっちゃってるってわけ？」

「……まあ、そうなってるわけだな」

「そーんなバカな話があるわけないでしょー。だってDollは、  
ご主人様に絶対服従なのよ？ それに主人に危害を加えないよう  
に、そう埋め込まれているはずじゃない。……この事件、もしかし  
て」

「ストップ。レミアはこれ以上、頭突っ込むな」

ソレイエルはなおも言葉を続けようとするレミアを遮り、息を吐  
いた。

ヴィンスヴェルト大公が動いているのが、恐らくその件だろうと  
いう予想は容易に付く。そして四大大公が動くような事件ともなれ  
ば、裏で誰が関わっているのか、何が起きているのかの想像は、ソ  
レイエルにとっては簡単に想像することが出来る事柄だ。

そして当事者と係わり合いがあるのが自分ともなれば、どんな陰  
謀が巡らされているのかなど、考えるまでもなかった。

しかしそれを口外する訳にもいかないソレイエルは、どうすれば  
この少女が事件から手を引くだろうと考えながら、内心溜め息を吐

く。

「……まあ、仮定にしかないが。相手は分からないが、少なくともそれなりに地位があるヤツだ。下手に関わったらお前だけじゃない、親父さんたちも危険になるかもしれない」

「そんなこと……え、本当、なの？」

反論しようとしたレミアが、ソレイエル我真剣な表情に言葉を詰まらせる。そして葛藤するように苦しい表情になると、肩から力を抜いて椅子に身体を預けるように、寄りかかった。

両親や村の住民達に迷惑をかけたくないのは、きっとここに居る全員の共通の想いだ。そして定住しているわけではないソレイエルと、そのDollであるライアンは、何かあればすぐにでもこの村から出て行くことが出来る。しかしここで生まれ育った自分は、そんな簡単に村を捨てることが出来ない。

考えるまでもない、変わることも無い結論に行き着き、彼女は落ち込んだように力の無い声で呟く。

「……そうね。下手にアタシが関わると、村の人たちにも迷惑がかっちゃうんだわ」

「きつと村の連中は、リュセアを含めて、オレたちをかばってくれるだろう。けどな、そうしてもらうわけにはいかねえ」

ソレイエルの言葉に同意するように、レミアが小さく頷く。

それは紛れもない事実だ。この村の人間は仲間意識が強く、土着の者であれ流れの者であれ、一度受け入れた者なら余程の罪を犯さない限り、護ろうとしてくれる。それが薬剤師としても、医師としても、この村に多大な貢献をしているソレイエルなら、恐らく何かあっても護ろうとする事ぐらい想像に難くない。

そうならない為にも、何かが起こる前に何としても村から離れなければならない。その為にはどうすればいいのか。

ソレイエルはこれから先の事を憂うように目を伏せると、溜め息を吐いて前髪を掻きあげた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9096p/>

---

Twinkles -RoseredCrystal-

2011年1月22日16時11分発行